

---

平成27年度神奈川県考古学会講座

---

主催 神奈川県考古学会

共催 横浜市歴史博物館

# 縄文時代の装い

平成28（2016）年2月21日  
神奈川県考古学会

## 開催次第

日 時 平成 28 年 2 月 21 日 (日) 10:00~16:35

場 所 横浜市歴史博物館 講堂

### 開会挨拶

岡本 孝之 会長 10:00~10:05  
講 座 担 当

### 趣旨説明

### 講 座

- 1 死者の身体と装い  
—生者・死者・土偶の耳飾— 中村 耕作 氏 10:05~11:05
- 2 石製装身具にみられる縄文人の装い  
—製作技術・分割行為・転用を中心にして— 五十嵐 瞳 氏 11:05~12:05

### （休憩）

- 3 骨角・貝製品からみた縄文人の装い 金子 浩昌 氏 13:30~14:30

### 講 演

- 縄文人の装い 國學院大學名譽教授 小林 達雄 氏 14:30~15:30

### （小休憩）

### 対 談

- 『縄文人の装い』 小林 達雄 氏 × 金子 浩昌 氏 15:40~16:30

### 閉会挨拶

中村 若枝 副会長 16:30~16:35

### 例 言

1. 本書は、神奈川県考古学会が平成 27 年度考古学講座として開催する「縄文時代の装い」の要旨集である。
2. 本書の編集にあたっては、各講師より玉稿を賜った。また、小林達雄氏の著書から装身具に関する記載を一部引用させていただいた。なお掲載書籍の選択は編集担当が行い、小林達雄氏に確認いただいた。記して感謝申し上げる。
3. 本講座は、神奈川県考古学会が主催し、横浜市歴史博物館に共催いただいた。
4. 講座担当は、五十嵐瞳・宇都洋平・横山諒人であり、開催にあたり役員諸氏の協力を得た。また、本書の編集は同担当により行った。

## 趣 旨

ネックレスやイヤリングなどのアクセサリー（装身具）は、日本列島において後期旧石器時代から事例がみられますが、北海道の一部の遺跡などに限られており、数は極めて少ない状況にあります。神奈川県内では、旧石器時代にまで遡る装身具出土例は、今のところありません。

このアクセサリーが、形が定まったものとして一定量の出土をみるようになるのは、縄文時代早期末葉であり、その代表格が玦状耳飾（玦飾）と呼ばれるイヤリングです。

これ以降、縄文人は、土、石、骨角、貝など様々な素材でアクセサリーを作っていたことが数多くの発掘調査から明らかとなっています。一方で、その用途や意味、使われ方など、いまだにわからないことが多いこともあります。

これら装身具は、日常生活に必要不可欠な所謂「第一の道具」ではなく、縄文人の精神文化の一端を表す「第二の道具」にあたると考えられ、彼らの精神世界を探る上で欠くことのできない資料と言えます。

今年度の考古学講座では、神奈川県内における縄文遺跡の装身具のあり方を、県内遺跡にとどまらず、広くかつ多角的にみることで、この地に暮らした縄文人の精神世界やものづくりの一端について考えてみたいと思います。

## 死者の身体と装い

—生者・死者・土偶の耳飾—

中村耕作（國學院大學栃木短期大学）

### 1 身体論としての「縄文時代の装い」

人が自らあるいは他者の身体・肉体をどのように捉え、動かすのか。性差・子どもや老いなどのカテゴリの問題、癖や運動あるいは身振りやポーズなどの動かし方、死体の扱い方、動物の身体との関係、身体の造形など、多様な問題を「身体」というキーワードからとらえ直して、その歴史性・集団性・社会的意味を研究する分野が「身体論」であり、社会学・文化人類学・民俗学などで実践されている。日本考古学における積極的な「身体論」としては、光本順の『身体表現の考古学』(2006)があり、弥生時代の分銅形土製品の分析から当時の身体感覚を検討している。他にも、認知考古学的視点・社会考古学的視点から、遺体や墓の位置などを検討する研究は少なくないが、そもそも考古学は、手の延長としての道具と、それを作り使う行為の痕跡を資料とする学問領域であるから、既存の研究領域の大部分が身体論の射程に重なる。本講座では、身体を装う、という観点から縄文人に迫りたい。

### 2. 縄文人の装い

#### 装いの意義

一般に「装い」には、①自らに対するもの、②超自然（カミ）に関わるもの、③他者に関わるものという3つの効果を持つ。本稿では、それぞれ美的側面、呪術的側面、社会的側面と呼ぶが、樋口清之（1939）が身体装飾の目的として挙げた本能的要求、実用的要求、信仰的要求、表示的 requirements と分類したうちの、実用性を除くものがほぼ相当する。社会心理学者の神山進（1999）は、現代の被服行動を「自己の確認・強化・変容」「情報伝達」「社会的相互作用の促進・抑制」の3機能に区分しているが、呪術的・信仰的側面が結局のところ自己に対するものとみれば、先の①・②を合わせて、③を細分したものとなる。縄文時代も同様であり、赤や黒や白の配色、強い動物であるイノシシやサメ、遠い山・海の向こうからもたらされたヒスイやオオツタノハガイなどの素材、渦巻や三角などの文様・形などには、さまざまな意味が込められていたと考えられる。

#### 装いの種類

はじめに、縄文時代全般の「装い」について概観する。「装い」は単に、「装身具」だけに留まらない（春成 1997、土肥 1997）。まず、身体そのものの変形として、抜歯があげられる。土偶などの類の線刻から入墨も想定されている。衣服の全体の実物は遺存していないが、編物・織物の存在と、土偶のデザインから衣服が復元されることがある。ここには、赤漆で飾った糸が使用されていた場合もあるらしい。装身専用の道具は、髪飾（木櫛、鹿角製簪・笄）・額飾（ヘアバンド）・

耳飾り・胸飾（各種の玉類）・腕飾（貝輪・木製腕輪）・腰飾（鹿角製・鯨類骨製腰飾）など数多くの種類が知られているが、下半身を飾ったものはあまり知られていない。さらに、持ち物がある。弓や石剣などは赤く塗られたり文様が施されたりしている。どのような文様の土器を持つか、という点も装いの一部だったかもしれない。土器や木器にも赤や黒が塗られた例は多く、装いの感覚を知ることができる。

#### 装身具の性格・用途・呼称

装身具の用途については、土偶に形作られているものや、人骨に着装しているものがあれば確実であるが、前者については耳飾が知られているにすぎない（他に櫛なども想定されているが、写実性は乏しい）。後者の代表例として著名なのが福岡県山鹿貝塚の女性人骨であり、頭部に笄と耳飾、胸元に大珠、両腕に貝輪が装着されていた。神奈川県では海老名市上浜田貝塚で、土坑の端部附近からやらや間を開けて2つの玦飾が出土しており、耳飾説の大きな根拠となってきた。一方、この装身具が胸元から出土していることから「玦状耳飾」の呼称を「玦飾」に変更する提案もあるので、数例のみで決着をつけることは難しい。また、こうした事情もあって、装身具の呼称の多くは不統一という現状がある。

装身具は全ての墓から出土する訳ではない。従って、持つ者と持たない者の違いを検討する必要がある。一般に、装身具を持つものは社会的地位が高いと想定されるが、その根拠は墓の位置や他の属性との相関関係にある。例えば、群馬県三原田遺跡や町田市忠生遺跡では中期の環状集落中央の墓域のさらに中央の墓からヒスイ大珠が出土しており、その重要性が指摘されている（栗島 2010）。晩期の例では、どの歯を抜くかという抜歯のタイプの違いが、腰飾りの有無や前歯に刻みを入れる叉状研歯の有無と関係があり、優劣2つの集団の存在が指摘してきた（春成 2002）。

また、装身具が特定の埋葬風習と関係する場合もある。前期後半の横浜市北川貝塚では、深鉢（おそらく顔に）伏せる葬法である土器被覆葬がみられるが、ここでは石製の管玉が出土している。同時期の群馬県中野谷松原遺跡でも深鉢の被覆葬と石製装身具が組み合っているが、一方でこの時期に新たに出現してきた浅鉢を副葬する墓が存在し、両者は何らかの意味で別グループであった可能性が高い（中村 2013）。

集団・階層以外の側面について、山田康弘（2004・2008）が全国の埋葬人骨と装身具の関係を整理した結果をみてみよう。合葬例を除く1611体中、装身具を着装していたのは6%である。腕飾（主に貝輪）は女性人骨に伴うことが多く、頭飾・胸飾・腰飾は男性人骨に伴うことが多いという男女差がある。年齢別では思春期までの子どもは腰飾・腕飾・玉類を持つことはあっても、耳飾りは伴わないことや、種類別では壮年期～熟年期の人が多様なバリエーションを持つことが明らかになっている。また、わずか3例のみだが、関節障害のある頭部に玉類を着装していた例（岩手県宮野貝塚）、石織が射こまれた腰骨付近に腰飾を着装していた例（宮野貝塚、福島県三貴地海貝塚）がある。素材別では男性はイノシシ・シカ、女性は貝が多い。

こうした問題のほか、ヒスイ加工や精巧な耳飾製作などの特殊技術を伴うブランド品としての価値、それらが交易（交換）されること自体の価値なども重要である（小林 2008）。

### 3. 土製耳飾にみる生者の装い・死者の装い・土偶の装い

#### (1) 検討の前提

##### 出土状況の区分

今回検討するのは、土製耳飾を中心とした生者の装い、死者の装い、超自然的存在の装いの3者の関係である。出土数を見る限り全ての縄文人が日常的に豪華な装身具を着装していたことは考え難いので、生者が着装する場合は彼らにとっても重要な場面であったことが想定される。葬儀における死者の装いや、土偶などの精神文化に密接にかかわる道具もまた、社会的に重要な意義を持っていたと考えられるので、その共通点や差異を比較検討することで、それぞれの身体への考え方に対する可能性がある。

死者の装いは、墓坑からの装身具・副葬品の出土例から検討する。生者の装いには、日常的な装いと、特別な場面での装いが区別されるべきであるが、残念ながら資料的制約から行えない。墓以外での出土例をもとに検討する。墓坑以外に廐屋に葬った可能性もあるが、他の遺物の状況を踏まえて、今回扱うものは廐屋墓の認定はし難いので、住居・遺構外出土例は死者以外が使ったものという前提で進める。春成秀爾（1980）は、人骨着装例は僅かだが、住居址や遺構外から多数の事例が出土している土製耳飾やヒスイ玉がある一方、鹿角製腰飾のほとんどが着装例として発見されていることから、死後を含めて常時着装していた装身具と、特別な機会に着装する2種類の存在を指摘している。但し、人骨に着装したものが生前常時着装したかどうかは一考を要する。さらに、本稿では、土偶および土版・土器に表された顔面表現を検討する。これらにおける装身具の着装状況については、装身具の用途研究と、頭部その他の穿孔の意味を除き、あまり検討されていないが、土偶・装身具双方の意味を検討する上で重要な問題と考えられる。

##### 土製耳飾の特徴

土製耳飾に注目するのは、本講座の構成上の問題もあるが、土偶などの顔面装飾遺物に示されたほぼ唯一の装身具であることによる。また、頭部は人体の中でも最も注目を集める部分であり、強い表示機能を持つ。主要な類型として、玦飾が土製化したもの、中期中葉～後葉に盛行するものの、後期後葉～晚期中葉に盛行するものとの3種があるが、いずれも、耳朶に孔をあけて装着するピアスである。サイズや文様にバリエーションがあり、サイズについては、人生の各段階において順に大きなものを付けていくことが想定されている（高山 2010、設楽 1983、大塚 1988、金成・宮尾 1996、吉田 2003ほか）。文様については、さまざまな分類案が提示されているほか、無文のものは仮のものとする見解、家系などと関係するという見解もあるが具体的には不明である。東日本の人骨共伴例では女性がやや多い（吉田 2008）。

#### (2) 中期～後期中葉の土製耳飾

##### 中期中葉～後葉

中期中葉（勝坂式期）に定着し、後葉（加曾利E式期）まで継続する。断面形は大きく、鼓状のもの、一端のみが広がるもの2つがあり、中央に小さな孔を貫通させるもの、比較的広い孔を貫通させるもの、孔のないもの、がある。文様は無いものも多いが、列点や渦巻などを施すも

のもある。

県内で最も多く土製耳飾が出土しているのが相模原市域である。上中丸A遺跡では11個が出土しているが、6個が住居内、他が遺構外で、墓坑出土例はみられない〔図1〕。橋本遺跡では2基の墓坑から1個ずつ石製垂飾が出土している。川尻中村遺跡では、9個中住居址5個、墓坑1個、遺構外3個である。他に滑石製垂飾1個が墓坑から出土している。このように、後葉を中心とした集落では墓坑出土例は僅かである。むしろこれらの集落の墓域では、土器の副葬や被覆葬、石匙（坪田2010）、石鏸や打製石斧、石皿、磨石・敲石などの日用にも使用する道具類の副葬が目立っている（山本2003）。

一方、大地開戸遺跡では勝坂式期の墓坑中から赤く塗られたものが出土している。中葉には他に秦野市東開戸遺跡でヒスイ製や琥珀製の大珠が墓坑から出土している。

中期の中でも中葉の土偶・顔面把手には、耳の部分が大きく貫通した孔で表現されているものが多く、耳飾または耳飾用の耳朶の孔と考えられてきた〔図2〕。このカタチは釣手土器まで継続する（中村2013）。一方、後葉にはパンザイ土偶などとあだ名される一群があるが、耳飾表現はみられない〔図3〕。

こうした状況からは、中葉における生者・死者・カミのいざれを装う場合にも耳飾をはじめとする装身具への関心が高かったのに対し、後葉には生者のみが耳飾で装うよう変化していることがわかる。

#### 後期初頭～中葉

その後、土製耳飾は小形化し目立たない存在となる。この間、墓坑からは若干の垂飾が知られているほか、土器・石器などの副葬が顕著である。但し、大規模な墓域である東京都町田市田端遺跡では周石墓から、群馬県みなかみ町深沢遺跡では配石墓から、それぞれ1対の出土例がある。

一方、土偶は、堀之内式期のハート形土偶・筒形土偶や加曾利B式期の突起土偶、山形土偶などが知られている。突起土偶や山形土偶の一部には耳に相当する部分に小さな穿孔があるものがあるが、耳飾の表現かどうかは分からぬ〔図3〕。このほか、脚を受けたり〔図4〕、胸部を環状に作るなどの異形注口土器や、その派生と考えられる双口土器が出現するのもこの時期であり、儀礼用土器の形態の変容が注目される。

#### （3）安行式期（後期後葉から晩期中葉）の土製耳飾と関連する文化事象

##### 安行式期の土製耳飾

神奈川県では、この時期に遺跡数・堅穴住居数が激減する。富士山の噴火によるという説もある（杉山・金子2013）。この後期後葉～晩期中葉には大宮台地を中心に安行式土器・土製耳飾・ミミズク土偶を多用する安行式文化が広がり、県内もその文化圏に含まれるほか、西関東・中部を中心とした高井東式・天神原式（後期後葉、晩期中葉）、山梨・静岡を中心とした清水天王山式（後期後葉～晩期中葉）の影響も強い。

この時期の代表的な遺跡が横浜市華蔵台遺跡である。後期中葉から晩期中葉まで継続するが、後期後葉の安行2式期以降（多くは晩期）と考えられる各種の土製耳飾が住居址から約20点、遺

構外から約 30 点出土している。9 号住居址では 6 点が出土しているが、このうち形態のよく似た 2 点が 5cm ほどの間隔で並んで出土している。晩期の集落である川崎市下原遺跡では住居址から約 30 点、遺構外から約 20 点、相模原市青山開戸遺跡では J3 住居址から 3 点、J4 住居址から 31 点が出土している〔図 5〕。華藏台遺跡や下原遺跡ではこの時期の墓坑群も検出されているが、耳飾の出土は無い。こうした住居・遺構外で多数の耳飾が出土する状況は、約 70 点が出土した町田市なすな原遺跡でも同様であるが、ここでは後・晩期の墓坑 126 基中 1 基のみ土製耳飾が出土している。安行式文化全体の状況をみても、晩期の墓坑群が検出された栃木県小山市乙女不動原北浦遺跡で 27 基中 1 基のみ、埼玉県白岡市前田遺跡では 27 基中 0 基と、耳飾の墓坑出土例は乏しい。

吉田泰幸（2003）はこうした 1 対で出土した例として、上記の他に後期～晩期の 10 例を挙げているが、墓と考えられるのは仙台・長野・山梨など遠隔地であり、小山市寺野東遺跡の環状盛土遺構から 3 組、埼玉県鴻巣市赤城遺跡で 2 組が目立つ。赤城遺跡例は、完形土器集中地点からの出土であるが、この遺構は土器のほか土偶や耳飾、土版などを多量に集積している。安行式文化ではこうした遺物の集中遺棄が多数知られており、特徴的な祭祀儀礼の形態と考えられている（阿部 2003、西村 2015 など）。このうち赤城の 1 組は、最大径 7.2/6.8cm、装着部径 4.4/3.9cm の大形品が完形で遺存していた。その状態の良さから鈴木正博（2012）は、保管用の設備があった可能性を指摘している。

赤城遺跡例のような大型の精巧品は「大型漏斗状透彫付耳飾」と呼ばれており、群馬県桐生市千網谷戸遺跡で製作遺跡が発見されているほか、他の例も群馬県が多い。安行 3c 式期に出現し、3d 式期には終焉を迎える短命のタイプである（増田 1990）。赤城遺跡と同じく完形品が出土したのが東京都調布市下布田遺跡（最大径 9.8cm）であり、国重文に指定されている。ここでも遺構は検出されていないが、周囲に多数の柱穴が検出されているので、何らかの施設があった可能性もある。

#### 石剣類

下布田遺跡では耳飾出土地点に近接して 12 本の大形石棒を集積した特殊遺構がある。さらに、やや離れて方形の石積を伴う墓坑があり、そこから石刀が出土している〔図 6〕。小形石棒・石剣・石刀類は、儀仗的役割が想定されており、多数の出土例があるが、副葬例は北海道を除くと他に乙女不動原北浦遺跡で 1 例が知られるのみであり、住居出土例や墓坑上面を含む配石や遺物集積からの出土が顕著である（新津 1985、鈴木 2005）。

#### ミミズク土偶と顔面付土器

安行式文化を構成するもう 1 つの特徴であるミミズク土偶〔図 8〕は、晩期前葉安行 3b 式までに確実に変遷するが（吉岡 2015）、3c 式期には中空形態へと変容する（鈴木 2011）。埼玉県桶川市後谷遺跡では、赤彩された土偶の耳の孔に木質が残っており、木質の飾りをはじめ込んだ例のあることが明らかになった（藤沼 2012）。中空ミミズク土偶について、小野美代子（2009）は、從来の土偶製作の伝統に、安行 3a 式期の異形脚付土器の製作技術が加わって形成されたものとみて

いる。異形脚付土器とは、後期後葉の異形台付土器から変遷し、2本の脚部を作り出した異形土器である。この安行3c式期を中心とした土器造形として、もう1つ注目されるのが顔面付深鉢である（林2000、鈴木2012）。神奈川県でも秦野市太岳院遺跡などで破片が出土している。

#### 安行式文化の最盛期と終焉

このように見していくと、安行式文化においては、大形・精巧な耳飾や、顔面付・脚付の土器を生み出すように身体装飾への関心が高まっていたこと、これら各種の造形のピークから安行3c式期がその最盛期であったことが推察される。遺跡数の少ない神奈川県域は、その中核ではないものの、その一翼を担っており、太岳院遺跡など県西部の遺跡では、安行系と清水天王山系の接点としての役割を果たしていた。

続く安行3d式期は、北部九州においては水田稲作が開始された弥生早期の開始時期にあたり、安行式文化圏において耳飾や石劍などが供えられた赤城遺跡、下布田遺跡、田端遺跡、群馬県安中市天神原遺跡、栃木県小山市寺野東遺跡など長期間継続した祭祀儀礼空間はここで終焉を迎える。安行3d式の次に来るには関東独自の土器様式ではなく中部一帯に広がる浮線網状文土器であり、この時期に東海・中部・関東でアフ・キビの栽培が始まる（中沢2014）。土肥孝（1997）は、髪飾・首飾・腕飾と異なり、弥生時代には引き継がれない点で、耳飾を縄文文化特有の装身具と位置づけているが、そうした意味でも耳飾文化の衰退は大きな変革とみられる。

#### （4）土製耳飾にみる生者（男／女）・土偶・死者

以上、中期中葉から晩期中葉までの、墓坑とそれ以外の土製耳飾の出土状況、土偶や土器造形にみられる耳飾表現などを概観してきた。墓坑からの耳飾出土例は從来からの指摘通り僅かであり、死者の装いと、生者の装いに違いがあったことを改めて確認した。死者は最終的に1組しか装着できないが、生者は成長とともに付け替えるのであれば、墓坑出土例が少ないので当然ではないかという反論も成立するが、少なくとも後期中葉においては、最大級の耳飾がいざれも墓坑外から出土している現状では、耳飾は死葬束とは別のものとして認識されていたと考えられる。

土偶の耳飾表現については、中期中葉と後期後葉～晩期中葉においては実物と連動して見られたが、実物の耳飾が目立たない後期前葉～中葉の土偶には、明確な耳飾表現は見られないという点では、両者の関係の強さを示している。吉田泰幸（2008）は、中期土偶・顔面把手の故意破壊説（渡辺2005）を引いた後、青山開戸遺跡J4住居址が被熱し、床面出土の4点の耳飾も被熱していたことから、実際もしくは象徴的な「王殺し」を想定する。このことは耳飾を着装した人物と土偶にイメージされた超自然的存在（カミ）との身体的な関連性をうかがわせる。

縄文時代中期以降における超自然的存在（カミ）の解釈については、土偶を女神・母神とする見解と、石棒を男神・祖靈とする見解が代表的である。少なくとも、これらの造形上のモデルが、それぞれ男・女であることは肯綮できよう。とするならば、土偶と親和性の強い耳飾は女性とのつながりが強いものとみられる。下布田遺跡においては石棒と耳飾りがやや離れて出土し、青山開戸遺跡でも土偶や石棒を伴わず耳飾のみが焼失住居から出土していることは、儀礼の一一番面において、男女の違いがあったことを想起させる。但し、小林達雄（2000・2012）も指摘するよう

に、その区別は厳然たるものではない。むしろ上記の2遺跡を除く、安行式期の多くの遺跡で土偶・耳飾・石棒類は一緒に遺棄されていることは、装身具の区分を含めた二項対立的世界観における男女の協業を物語っている。

一方、死者はこうした動きとは別の位置づけが想定される。前期・中期には環状集落の中心に墓域を設け、後期に核家屋に近接させて土器副葬墓を配置し（石井 1994）、晚期には後期の墓域の上に配石を構築する（戸田 1971、阿部 2003）など、縄文人は死者を重視しており、祖先祭祀として位置づけられている（谷口 2007）。後・晚期には、これらの墓域上部に耳飾や石棒類が遺棄されることも少なくない。

但し、問題は、死体そのものに共伴するのは土器・石器などの第一の道具であり、装身具や土偶・石棒などの第二の道具や釣手土器などの非飲食系土器は伴わないことである。こうした点では、住居内での儀礼行為（山本 2007）の位置づけが課題となる。筆者は、これまで釣手土器や注口土器が床面から出土する住居が廃屋墓であった可能性を想定してきたが（中村 2013）、死体と死者（祖靈・カミ）の関係、第一の道具と第二の道具の関係など、縄文人の身体観・道具観という観点から改めて検討が必要となってくる。

#### 引用・参考文献

- 阿部友寿 2003 「縄文後晩期における遺構更新と「記憶」—後晩期墓壙と配石の重複関係について」『神奈川考古』第 39 号
- 石井 寛 1994 「縄文後期集落の構成に関する一考察—関東地方西部域を中心に—」『縄文時代』5
- 大塚和義 1988 「縄文人の観念と儀礼的世界」『古代史復元 2』講談社
- 小野美代子 2009 「木菟型中空土偶成立の背景」『縄文時代』第 20 号
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1997 『平成 8 年度かながわの遺跡展 耳飾と古代のモード』
- 金成南海子・宮尾亭 1996 「土製耳飾の直径」『國學院大學考古学資料館紀要』第 12 輯
- 栗島義明 2010 「ヒスイとコハク」『移動と流通の縄文社会史』雄山閣
- 神山 進 1999 「被服行動の社会心理学—装う人間のこころと行動」北大路書房
- 小林達雄 2000 「絶対的でない男女の役割—装身具—」『縄文人追跡』日本経済新聞社
- 小林達雄 2008 「交易」「交易の縄文流儀」『縄文の思考』筑摩書房
- 小林達雄 2012 「女、男、縄文人」『JOMONESE』美術出版社
- 設楽博己 1983 「土製耳飾」『縄文文化の研究 9 縄文人の精神文化』雄山閣出版
- 杉山浩平・金子隆之 2013 「縄文時代後晩期の伊豆・箱根・富士山の噴火活動と集落動態」『考古学研究』第 60 卷第 2 号
- 鈴木素行 2005 「彼岸の石棒—道南地方の周堤墓と関東地方の集落跡にみる完形の石棒—」『地域と文化の考古学 I』六一書房
- 鈴木正博 2011 「土偶に学ぶ」『古代』第 126 号
- 鈴木正博 2012 「大宮台地を中心とした「人面文土器」—馬場小室山遺跡の「人面文土器」から洞

- 察する地域社会の波動ー」『土偶と縄文社会』雄山閣
- 高山 純 2010 『民族考古学と縄文の耳飾り』同成社
- 谷口康浩 2007 「祖先祭祀」『縄文時代の考古学 11 心と信仰』同成社
- 千葉 稔 2012 「神奈川県立歴史博物館所蔵の土偶・人面把手」『神奈川県立博物館研究報告－人文科学－』第 38 号
- 坪田弘子 2010 「土壙墓に埋納された石匙—関東・中部地方の縄文時代前・中期の事例から—」『比較考古学的新地平』同成社
- 土肥 孝 1997 『日本の美術 369 縄文時代の装身具』至文堂
- 戸田哲也 1971 「縄文時代における宗教意識について—田端環状積石遺構を中心として—」『下總考古学』4
- 中沢道彦 2014 「栽培植物利用の多様性と展開」『季刊考古学別冊 21 縄文資源利用と社会』
- 中村耕作 2013 『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』アム・プロモーション
- 新津 健 1985 「石劍考—中部、関東を中心とした出土状況から—」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』2
- 西村広経 2015 「東関東における縄文時代後・晩期の堅穴住居儀礼」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 29 号
- 林 克彦 2000 「顔と器—縄文時代晩期の「顔付き土器」について—」『青山史学』第 18 号
- 樋口清之 1939 「日本先史時代人の身体装饰」『先史学・人類学講座』第 13 卷、第 14 卷
- 春成秀爾 1980 「縄文晩期の装身原理」『小田原考古学研究会会報』第 9 号
- 春成秀爾 1997 『歴史発掘 4 古代の装い』講談社
- 春成秀爾 2002 『縄文社会論究』培書房
- 藤沼昌泰 2012 「埼玉県後谷遺跡」『土偶と縄文社会』雄山閣
- 増田 修 1990 「縄文時代の耳飾り」『月刊文化財』第 326 号
- 光本 順 2006 『身体表現の考古学』青木書店
- 山田康弘 2004 「縄文時代の装身原理」『古代』第 115 号
- 山田康弘 2008 「装身具の着装意義」『縄文時代の考古学 10 人と社会』同成社
- 山本輝久 2003 「墓壇内に倒置された土器」『神奈川考古』39
- 山本輝久 2007 「屋内祭祀の性格」『縄文時代の考古学 11 心と信仰』同成社
- 吉田泰幸 2003 「縄文時代における土製栓状耳飾の研究」『名古屋大学博物館報告』19
- 吉田泰幸 2008 「土製耳飾の装身原理」『縄文時代の考古学 10 人と社会』同成社
- 吉岡卓真 2010 「関東地方における縄文時代後期後葉土製耳飾りの研究」『千葉縄文研究』4
- 吉岡卓真 2012 「土偶の装飾表現と装身具—ミミズク土偶と耳飾り—」『土偶と縄文社会』雄山閣
- 吉岡卓真 2015 「縄文時代後晩期ミミズク土偶の変遷—多量保有遺跡の成り立ちを考える—」『考古学集刊』第 11 号
- 渡辺 誠 2005 「底を抜かれた人面装飾付土器」『人類の創造へ』中央公論社

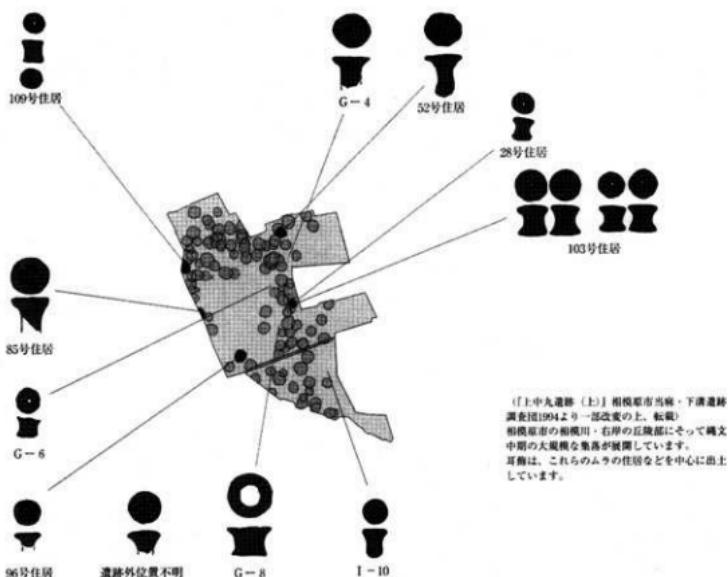


図1 相模原市上中丸遺跡の土製耳飾の出土状況（神奈川県立埋蔵文化財センター 1997）

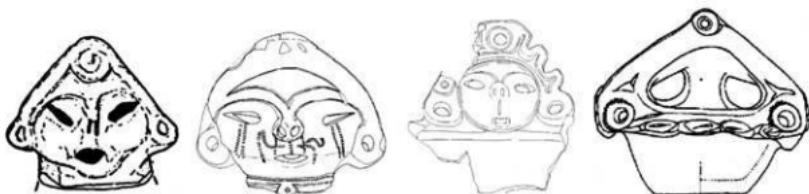


図2 中期中葉の耳飾表現

（左から 土偶：秦野市天神台 顔面把手：横浜市公田ジョウロ塚・伊勢原市宮之上 釣手土器：伊勢原市御伊勢森）

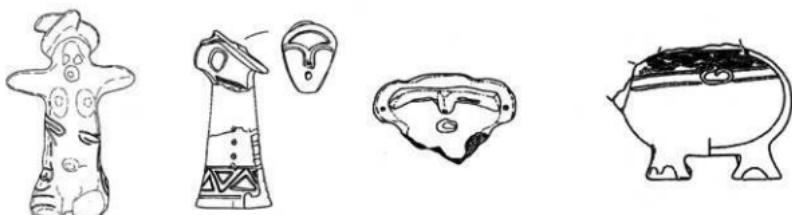


図3 耳飾表現の希薄な中期後葉～後期中葉

（左から 中期後葉：相模原市川尻中村 後期前葉：鎌倉市東正院 後期中葉：東村山市下宅部）

図4 足の生えた注口土器

（大磯町城山）

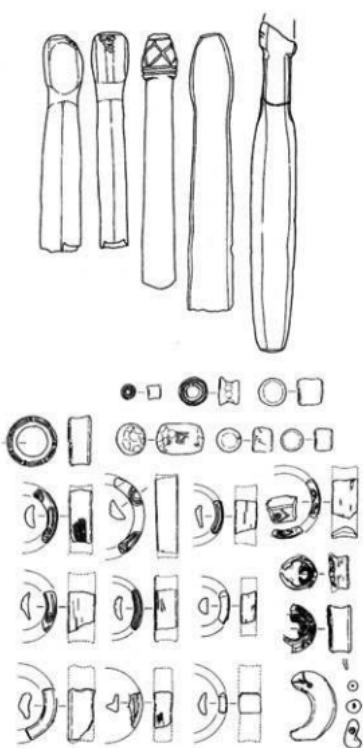


図5 川崎市下原遺跡2号住居の石剣と耳飾・土製勾玉・ヒスイ玉

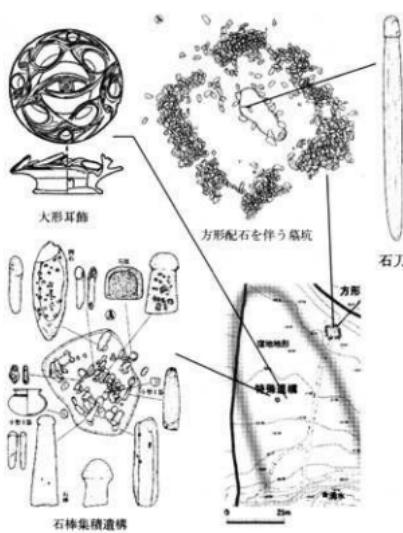


図6 調布市下布田遺跡の耳飾と石刀



図7 秩野市太岳院遺跡の耳飾

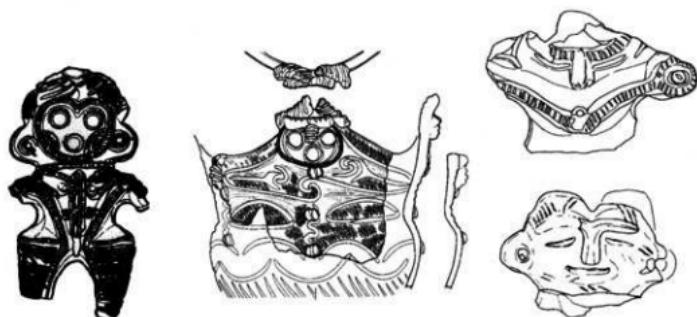


図8 安行式文化の耳飾をもつた顔面表現  
(左: 桶川市後谷遺跡 右上: 秩野市太岳院遺跡 右下: 横浜市仏向貝塚)

# 石製装身具にみられる縄文人の装い

—製作技術・分割行為・転用を中心に—

五十嵐 瞳（平塚市教育委員会）

## 1 はじめに

縄文時代の装身具は、石製に限らず、土製、骨製、角製、貝製、木製、化石（琥珀）製といったように多様な素材が採用されている。ここで取り上げる石製品については、その形状から利器ではないことが容易に想像でき、かつ非在地系石材の利用や琅玕質な素材の選択、研磨による光沢などから注目されやすいものとして、古くから研究対象となってきた（藤田 1989）。

ところで、石製装身具の登場は旧石器時代にまで遡る。小林達雄氏（2006）は、石の加工の基本は「打ち欠く、割る、剥ぎ取る、彫琢すること」とし、これに「研磨技術」が応用されてきたが、「穿孔技術」はそれらの技術の登場からは相当に年月を経たうえで日本列島においては旧石器時代文化最終段階に現れるとした。日本列島では、三重県出張遺跡の有孔円板を嘴矢とし、北海道湯の里4遺跡、ビリカ遺跡、柏台1遺跡からは所謂ビーズが出土している。その他、岩手県崎山牧場I遺跡や静岡県富士石遺跡からも有孔の石製品が出土している。北海道の事例は、かんらん石や琥珀を素材とし、色調も赤・白・緑・黒と多彩である。湯の里4遺跡や柏台遺跡では赤色土や赤色顔料が同時に見つかっており、当時の赤という色に対する特別な想いがうかがえる。また、湯の里4・ビリカの事例では複数個の出土がみられ、1点物の装身具ではなく、複数個を連珠にして用いたことが推察される。この連珠のあり方は、縄文時代の石製装身具の歴史に照らし合わせれば、後期以降に多くみられるもので、玦状耳飾が登場する早期末葉～前期前葉、その盛行期であると同時にヒスイ製の装身具が登場する前期、ヒスイ製の大珠の盛行する中期には頻繁にはみられない現象である（高橋 2005）。このことは、装身の仕方の歴史的変遷を考える上で重要である。ただし、種子や竹、骨など有機質素材を利用した連珠の可能性も考慮すべきであろう。

今回表題にも掲げた「石製装身具」という用語が示す対象は多様で、「の」字状石製品」「勾玉」や、「玦状耳飾」のような用途を示唆する遺物、実際に観察可能な穿孔とそこに紐を通し垂下したとの想定を基に定義される「垂飾」、さらには、かなり広い範囲を包括する「玉」「玉製品」「玉類」なども含んでいる。

今回は、坪田弘子氏（2005、2012a・b）によってすでに神奈川県内の集成が行われている玦状耳飾とヒスイ製品について、特に玦状耳飾を重点的に、その研究動向、県内および周辺の様相を概観する。その上で、石製装身具における分割行為と転用について考えてみたい。

## 2 玮状耳飾

### （1）神奈川県内の様相

神奈川県内の玦状耳飾については、坪田弘子氏により集成が行われている（坪田 2012）。坪田

氏は、地域ごとの様相を概観した上で、次のようにまとめている。

- (1) 石材は、滑石が最も多く、蛇紋岩がこれに次ぐ。
- (2) 大きさは、長軸で最短 2.1 cm、最長 6.5 cm。
- (3) 平面形は、中央孔が大きくドーナツ状を呈するものが早期末葉前後に、縦長・三角形を呈するものは前期末葉から中期初頭に多い。
- (4) 断面形は、円形ないしカマボコ形を呈する分厚いものから薄くて扁平なものへといふおおまかな変遷が捉えられる。
- (5) 上浜田遺跡例は、時間差があまりない状況で構築されたと考えられる土壙から、断面形が分厚いものと扁平なものとが出土しており、イレギュラーな事例である。
- (6) 出土状況は、包含層中や遺構外からの単独出土が最も多いが、土壙出土例は 23 例確認でき、その時期は、早期末葉から黒浜・諸磯式期を経て中期初頭まで確認された。
- (7) 製作址については、吉岡遺跡例が未製品の可能性があるが、製作工程を示すような資料がまとまって出土した遺跡はない。

このうち、(5)については、「今後、出土時期の明らかな事例を指標として神奈川県内での編年を構築していくことが必要」と指摘しており、(6)については、その様相から玦状耳飾の「出現期から盛行期を通じて副葬品ないしは着装品としてもいられていたと考えられ、玦状耳飾の社会的意義を推定する上で重要なあり方と評価される」としている。最後に、集成された資料をもとに「玦状耳飾の様々な属性を地域間で比較研究を行っていくことで新たな研究の方向性を見出せるものと期待される」と結んでいる。

## (2) 玳状耳飾研究の現状—神奈川県内の事例を参照しながら—

ここまで「玦状耳飾」という用語で説明してきたが、現在この遺物を示す学術用語には「玦状耳飾」の他に「玦飾」があり、筆者は基本的に後者を用いている（五十嵐 2005a ほか）。「玦飾」は、近年登場した用語で、耳飾りという用途だけでは説明できない出土事例が増えたことと、研究対象地域が列島を越え東アジア地域に広がっており国際的に共通する用語で議論を行う必要性が出てきたことに起因する（藤田 2004）。以降「玦飾」という用語で説明していくが、日本における縄文時代研究では「玦状耳飾」が大勢を占める。

玦飾は、これまでに型式学的研究、器種組成論、石材研究、用途論、技術的研究など多角的に検討されており、そうした研究を基礎に「玦状耳飾」「玦飾」にみられる大陸渡米説の賛否に関わる議論も行われている。

### a. 石材のあり方

玦飾は、モース硬度 1 の滑石やモース硬度 3 の蛇紋岩など比較的軟質石材を素材とすることが特徴的であり、県内事例も同様の傾向がみられる。また、滑石以外の石材として、結晶片岩（藤沢市湘南藤沢キャンパス内遺跡）や石英片岩（茅ヶ崎市白久保遺跡）などもあるが、玦飾素材の滑石には滑石片岩が多くみられ、これらの石材はその範疇でとらえることができよう。石材には、観察者によって石材名称が異なる場合がある、緑色石材がヒスイ・軟玉と同定されやすいなどの

課題があり、これは他の石器研究にも言える。前者は、考古学研究者のみならず岩石・鉱物を専門とする研究者にもみられることで、そもそも同一資料であっても観察する箇所によって石材名称が異なる場合もある。さらに、滑石については理化学的な分析が途上段階であり、ヒスイのような産地同定は困難な状況にある。

一方で、滑石製品を観察していくと、その様相は一概ではなく、茶褐色で半透明（鉛色で琅玕質）（藤沢市十二天遺跡など）、白色で非琅玕質、黒色で非琅玕質、緑色で琅玕質（海老名市上浜田遺跡、横浜市玄海田南遺跡、伊勢原市下北原遺跡）など、色調や琅玕・非琅玕で分類ができる場合が少なくない。富山県極楽寺遺跡では、茶褐色で半透明（鉛色で琅玕質）のものが、群馬県新堀東源ヶ原遺跡では白色で非琅玕質かつ片理が発達しているものが各々多くみられる（筆者観察による）。白色で非琅玕質かつ片理が発達するという特徴は、滑石片岩にみられるもので、周辺では群馬県南部や埼玉県北部など三波川変成帯が産地として想定される。また、緑色で琅玕質の中には、黒色粒子を含むものがある。数量が少なく具体的な分布を把握するには至っていないが、県内ほか埼玉県・東京都に類例がみられる。これは外観の類似から、報告書中で蛇紋岩と同定されている場合もある（五十嵐 2009a）。

こうした滑石の石材の特徴は、報告書中に反映されることが少なく、様相の把握には実際の観察が不可欠といえる。また、滑石片岩のように、石材の特徴を分類した上で、候補となる産地の調査を進め、最終的に理化学分析による産地同定を可能とするような取り組みが必要と言える。その上で、既存の資料を再整理していく必要性もあり、実際にそうした取り組み例もある（清水・大屋 2005）。

#### b. 形態的特徴と技術的特徴

坪田氏のまとめ（2）（3）にみられる形態的特徴とその変遷は、氏も指摘しているとおり概ねこれまでの編年研究に合致する（川崎 2004b）。

このうち、厚みがあり平面円形を呈するという早期末葉～前期前半に位置付けられる形態的特徴をもつ資料の中には、糸鋸技法による特徴的な製作技術痕跡がみられる場合がある。糸鋸技法は、牟永抗氏（2003）によって明らかにされたもので、製作道具そのものの出土例はないが、その痕跡から縄等を用いた切断が想定されている。この痕跡は玦飾の切り目作出に用いられ、その特徴は、波状放物線や端部の突起などである。糸鋸技法が明らかにされる以前は、切り目作出には擦切技法が用いられていたと考えられており、実際、前期中葉以降の薄手の玦飾は擦切技法による切り目作出痕跡がみられる場合がほとんどである。なお、筆者は、糸鋸技法に類似の技法として弓切技法の可能性も考えている（五十嵐 2009b）。県内事例では、横浜市玄海田南遺跡や清川村久保ノ坂遺跡に糸鋸技法による痕跡が観察できる（筆者観察による）。

玦飾の特徴的な製作痕跡として、県内資料で観察できた事例はないものの、トクサによる研磨がある。トクサは、現在は本州中部から北海道にかけて生息するシダ植物門に属する草本で、湿地性に富む場所に生育することが多い。漢字表記の一つである「研草」からも明らかなように、ヤヌリとして利用されてきた植物で、現在もこけし製作時の研磨などに用いられている。トクサ

には珪酸体を含んだ突起の特徴的な配列がみられ、この突起列の痕跡が一部の滑石製品にみられるのである（堀江 2009、近江 2010）。筆者が実見した資料のうち、新潟県十日町市寺ノ下地内探集資料と埼玉県寄居町東国寺東遺跡出土資料にこの痕跡が観察できる（五十嵐 2005b、2009a）。ただし、観察・執筆当時はトクサ痕跡という認識はなく、堀江武史氏からの教示や近江哲氏との議論に基づき、再認識したものである。このトクサ痕跡もまた、報告書中の実測図や記載から読み取ることは難しく、実際の観察が不可欠と言える。県内事例にもトクサ痕跡の観察可能な資料がある可能性があり、注視していきたい。

### c. 積飾研究の今後

先に大陸渡來說について触れた。この議論には、川崎保氏（2004a）のセット関係に関する見解も欠かせない。積飾と篠状垂飾がセットになって、列島を越え東アジア地域から出土する様相を明らかにしている。一方で、列島における自生説（高山 2010、土肥 2004）もあり、賛否について決着はついていない。筆者は、中国遼寧省查海遺跡と福井県あわら市桑野遺跡の積飾を観察する中で、形態的特徴、石材の類似、製作技術の類似などを見て取り、鄧聰氏（2004）の見解も踏まえ大陸渡來說に賛成の立場をとっている。

今回取り上げた石材や技術的特徴のように、現段階では認識されていない情報も多い。これらを蓄積することも研究の展開には不可欠と考える。

## 3 ヒスイ製品

積飾同様、神奈川県内の出土のヒスイ製品についても、坪田弘子氏が集成している（坪田 2005、2012）。ここで坪田氏（2012）は、その様相を次の内容にまとめた。

- (1) 大珠の出現期は中期中葉藤内式期に求められ、中期後半にかけて盛行、後期前葉から中葉にも少數ではあるが残存する。
- (2) いずれの時期も分布上に地域的な偏在性は認められない。
- (3) 大珠の形態的特徴は鰯節形、緒締形、有溝形、その他の 4 タイプが存在し、出現期には緒締形が多くみられる。
- (4) 出土状況は、遺構外ないし包含層出土例が最も多く、堅穴住居址出土例がこれに次ぎ、土壙出土例は少ない。
- (5) 中期の事例については、主にいわゆる拠点的集落から出土する傾向が認められ、出土点数については基本的には 1 遺跡 1 点であり、複数個体を保有する遺跡はごく限られている。

坪田氏の指摘からもわかるように、先に触れた連珠については、県内事例からは少なくともヒスイ製品の連珠の様相は窺えない。また、秦野市東開戸遺跡ではヒスイ製大珠出土の土坑と琥珀製大珠出土の土坑があり、注目されよう。

神奈川県は、例えば隣接する東京都に比べるとヒスイ製品の分布密度はそれほど高くない。中期・後期を中心とした「大珠・ヒスイ製品」というほぼ同一の視点で集成した時に、東京都 97 例に対し、神奈川県は 46 例とほぼ二分の一となる（山本 2012）。

ヒスイ製品については坪田氏（2012）により詳細に検討されているため、これ以上は述べないが、（5）に掲げたように中期の所謂拠点集落出土の傾向は、今後他の文化要素との関係を比較検討する上で重要となろう。

#### 4 石製装身具に対する分割行為と転用について

以前、硬玉製大珠の分割について、一つのものを複数に分ける行為である「分割」は、個人から個人、集団から集団といった「もの」の移動を示唆するものとし、「相手に与えると同時に自らにも残すという同時的な意味が付される」ことが重要であるとした（五十嵐 2007）。また、この事象は早期末葉から前期前葉の石製装身具にも看取できるとし、その事例として群馬県新堀東源ヶ原遺跡から複数出土している管玉半割品をあげた。

ヒスイ製品の分割について言及を重ねている栗島義明氏は、近年、この分割行為を「糸切り技法」という技術的観点から再検討し、糸切り技法によってヒスイやコハク製の製品が「等分割」された事例が複数存在すると指摘している（栗島 2014）。その上で、「分割行為」を、「ヒスイ・コハクなどの貴石製大珠が」「ムラ長等の位階表示を担っていたものとすると、逆説的にはそれらの位階表示装置としての製品が入手の見込みが無い場合、母村や帰属集団からの分与で賄いざるを得なかったに違いない」として、その場面として「新たにムラを構える、分村時などの集団の再編成時であった蓋然性がたかい」としている。そうした中で、「最終的な分割作業が、分断という作業で終了していることは、分割面に残る凸観察からも肯定され、しかもその面が磨かれて消失したケースは皆無と言って良い。」とし、「分割以前の穿孔痕をあえて残存させている事例も、財の分割が社会的行為であったとの見解を支持していようか。」としている。一方で、この論文のもう一つの主題である「糸切り技法」については、「分割行為によるヒスイ・コハク製大珠の損失を最小限に留め、効率的に分割作業を進めようとした場合」に、「最も優れた技術」と評価している。なお、この「糸切り技法」は、藤田氏のいう「糸鋸技法」と同一のものと位置づけられる。

この分割という事象と、これまで転用としてのみ認識されてきた事象とをあわせ、栗島氏も用いた「分与」という考え方で再検討する必要性がある。玦飾の中には、横浜市宮之前遺跡例、玄海田遺跡例、西之谷大谷遺跡例、川崎市宮添遺跡例、藤沢市北窪遺跡例、伊勢原市田中・万代遺跡例、秦野市鶴巻上ノ窪遺跡例のように縦半分を欠失したものに正面から穿孔を施し、転用したとみられる事例がある。特に宮之前例や田中・万代例は欠損部が研磨されており、転用を示唆している。また、横須賀市上吉井南遺跡や藤沢市十二天遺跡など穿孔方向から明らかな転用事例もある。もちろん、海老名市上浜田遺跡や川崎市金程向原II遺跡、平塚市真田・北金目遺跡群のように補修の意図が読み取れる穿孔もあるので、ひとくくりにはできないが、宮之前例や田中・万代例などで半割の片割れが出土していない点、同じ様相が群馬県新堀東源ヶ原遺跡にもみられる点、穿孔が施された半割品の土坑出土（藤沢市北窪遺跡）、さらに、穿孔が施された半割品を模した土製品の存在（五十嵐 2014）などから、単なる「破損→転用」という図式を超えて、「分与」という可能性も考えていく必要があり、今後の検討課題といえる。

## 引用・参考文献

- 五十嵐睦 2005a 「査海遺跡における玉器」『東アジアにおける新石器文化と日本II』國學院大學 21COE  
第 I グループ考古学班
- 五十嵐睦 2005b 「十日町市寺ノ下地内採集の玦飾」『越佐捕遺些』第 10 号
- 五十嵐睦 2007 「硬玉製品の製作と交易」『縄文時代の考古学 6 ものづくり』同成社
- 五十嵐睦 2009a 「寄居町出土の玦飾について」『紀要』9 号 埼玉県立川の博物館
- 五十嵐睦 2009b 「玦飾製作における切り目作出技術について～「弓切技法」の実験的考察～」『日本玉文化研究会長野大会資料 玳瑁耳飾（玦飾）の製作技術からみた玉文化交流』
- 五十嵐睦 2014 「東京都の玦状耳飾（玦飾）集成」『玉文化』第 11 号
- 近江哲 2010 「トクサの史前利用～植物利用における歴史背景と痕跡の観察から～」『紀要』10 号 埼玉県立川の博物館
- 川崎保 2004a 「玦状耳飾系統・起源論概観」『環日本海の玉文化の始源と展開』
- 川崎保 2004b 「玉の類型編年」『季刊考古学』第 89 号 雄山閣
- 栗島義明 2014 「もう一つの技術—縄文時代の「糸切り技法」についてー」『利根川』36
- 小林達雄 2006 「縄文人のヒスイ觀念ーあとがきにかえてー」『古代翡翠文化の謎を探る』
- 清水慎也・大屋道則 2005 「収蔵石製品の鉱物名の同定」『研究紀要』第 20 号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木克彦ほか 2004 『季刊考古学 第 89 号 縄文時代の玉文化』雄山閣
- 高橋浩二（研究代表者） 2005 『ヒスイ製品の流通と交易形態に関する経済考古学的研究』
- 高山純 2010 『民族考古学と縄文の耳飾り』同成社
- 堤隆 2009 『旧石器時代ガイドブック』新泉社
- 坪田弘子 2005 「神奈川県出土の縄文時代の硬玉製玉類」『玉文化』第 2 号
- 坪田弘子 2012a 「神奈川県出土の玦状耳飾集成」『玉文化』第 9 号
- 坪田弘子 2012b 「神奈川県出土の大珠とヒスイ製品～縄文時代中期から後期にかけての様相～」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』
- 鄧聰 2004 「東アジアの玦飾の起源と拡散」『環日本海の玉文化の始源と展開』
- 土肥孝 2004 「日本自生説を考える」『季刊考古学』第 89 号 雄山閣
- 藤田富士夫 1989 『考古学ライブラリー 52 玉』ニュー・サイエンス社
- 藤田富士夫 2004 「大陸渡米説を考える」『季刊考古学』第 89 号 雄山閣
- 堀江武史 2009 「日本出土玦状耳飾の製作技法」『日本玉文化研究会長野大会資料 玳瑁耳飾（玦飾）の製作技術からみた玉文化交流』当日配布資料
- 山本孝司 2012 「東京都内出土の大珠およびヒスイ・コハク製品について」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』
- 有限会社 鎌倉遺跡調査会 2004 『北窪遺跡（No.103）発掘調査報告書』
- 牟永抗 2003 「關於史前琢玉工藝考古學研究的一些看法」『史前琢玉工藝技術』国立台湾博物館

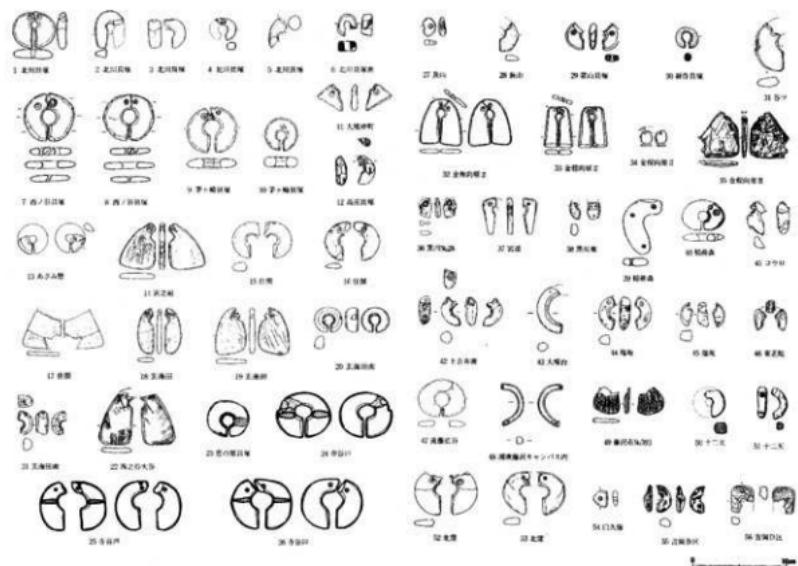


博奈川流域内の段状耳鼻出土遺跡分布図  
(数字は著者表の遺跡 No. に対応する。)

- \* 運用  $S_{\text{obs}}$  は各部の音量に応じて、実測値  $S_{\text{obs}}$  は第二～六回の音量に対応する。
- \* 実測値の測定誤差より計算誤差についても音量に影響を及ぼすとした。

(福田 2012a を一部改変)

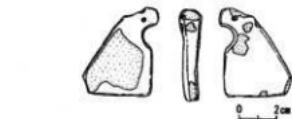
第1図 神奈川県内法篩分布図 (坪田 2012a を一部改変)



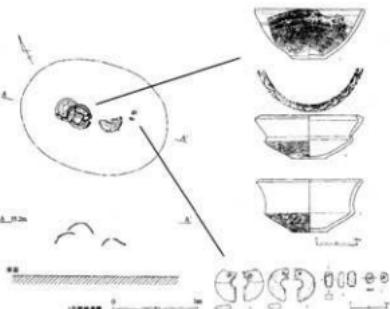
第2図 神奈川県内の玦飾（1）（坪田 2012a）



第3図 神奈川県内の玦飾（2）（坪田 2012a）



第4図 東京都多摩ニューカウンNo.72・795・796遺跡出土土製品（五十嵐 2014）



第5図 藤沢市北座遺跡玦飾出土状況  
（有限会社 鎌倉遺跡調査会 2004）



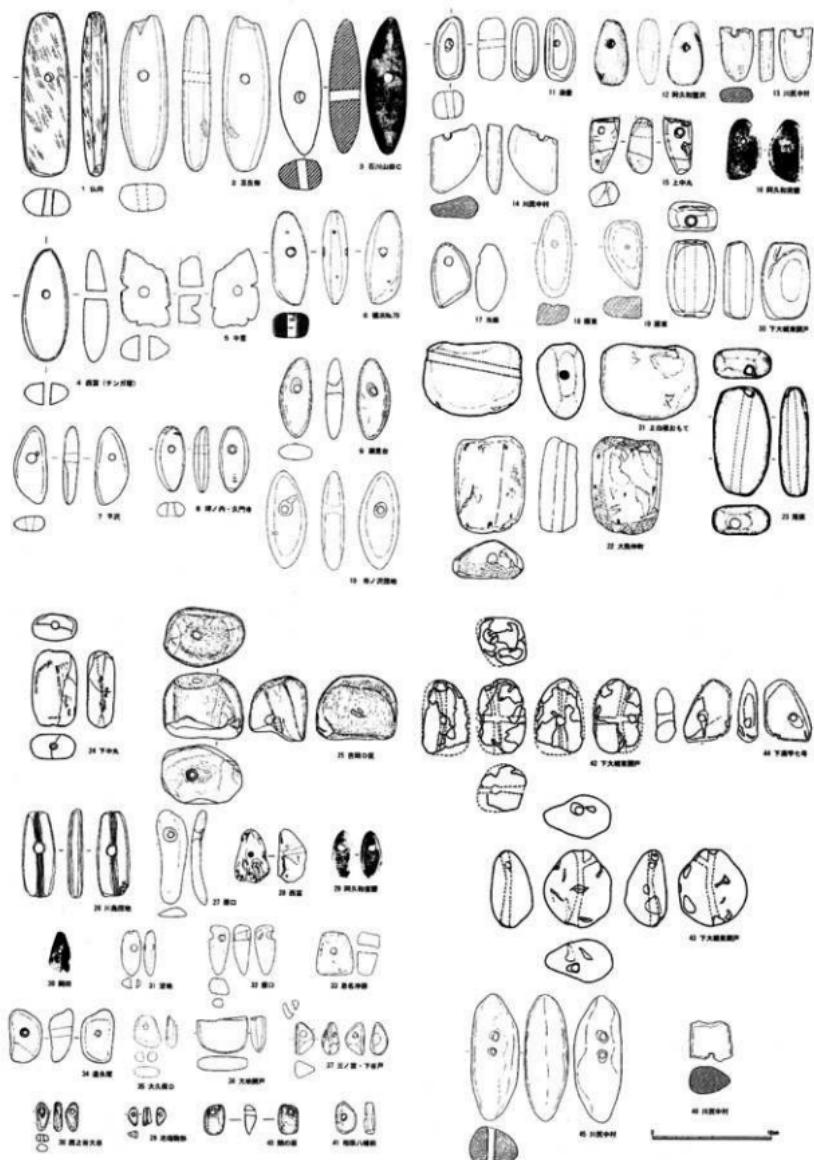
神奈川県内の大珠・ヒスイ製品出土遺跡

表1 神奈川県内大珠・ヒスイ製品出土遺跡一覧

No.	遺跡名	セキネメイ	所在地
1	阿久和蟹沢	アワガラザワ	横浜古都部区阿久和町 2356 付近
2	阿久和の塚	アワガラヤコシ	横浜古都部区阿久和町 4283 他
3	市ノ内遺跡	イシナワガダンチ	横浜市都筑区市ノ内町 704 他
4	上白根おもて	カミシラネオモテ	横浜市都筑区上白根町 405-1 他
5	西之谷大谷	ニシノヤオオヤ	横浜市都筑区三保町西之谷 337-1 他
6	横浜市79	ヨコハマナンバー79	横浜市緑区二保町
7	大堀町	オオタマヤカマツ	横浜市都筑区大堀町 760
8	川島遺跡	カワシマダンチ	横浜市保土ヶ谷区川島町 1472 他
9	庵原	アヌハ	横浜市保土ヶ谷区川島町
10	仏向	ブロコウ	横浜市保土ヶ谷区向日町 845-1 他
11	見兎台	シオミダイ	川崎市宮前区見兎台
12	浦宿	アブラツボ	三浦市下崎町小綱代半戸強 1201-3
13	石川山田C	イシカラヤマダC	横浜市石川山田
14	西宮貝塚	ニシミカイヅ	横浜市西宮
15	吉岡山遺跡群D区	ヨシオカシキダングD	横浜市吉岡山遺跡ヶ谷
16	笠地	モウタ	海老名市笠地 1300 他
17	岡田	オカダ	高座郡寒川町岡田 2985 他
18	門の原	モノハラ	藤崎の原 1927 他
19	上中丸	カミチカラマル	相模原市下溝字上中丸 406 他
20	下中丸	シモチカラマル	相模原市下溝字中丸 611 他

21	下溝七号	シモジコウナガタ	相模原市中央区下溝字中丸七号 1926-1 他
22	当塙	タツマ	相模原市谷口
23	和泉八幡宮	アシハラハチマンマエ	相模原市相模原
24	草束	ハラヒシ	津久井郡山田町小倉字草束 285-2 他
25	川尻中村	カワジリナカムラ	津久井郡山田町小倉字向原 1285-1 他
26	大地開口	オオチカイト	津久井郡久井町大土地開口 3284.3 他
27	恩名神社	オナオキハツ	厚木山星名神社
28	轟口	ハラグチ	平塚市上野町 1617 他
29	大久保D	オカバグD	茅ヶ崎市大久保 2257 他
30	二ノ宮・下谷口	サンノミヤセキ	伊勢原市二ノ宮字下谷口 1300 他
31	坪ノ内・久門寺	ツバノウチクタケンジ	伊勢原市坪ノ内
32	池端御形	イハラハコマガタ	伊勢原市池端
33	中里(36-31)	ナカザト	秦野市上大郷字芦戸 509-1 他
34	平沢	ヒラサワ	秦野市平沢
35	道水塚	ミナガワカ	秦野市山寺字道水塚
36	下大藏関口	シモオオカニヒガシカイド	秦野市下大藏 1170 他
37	五反塚	ゴテンタケ	南足柄市岩泽字五反塚 701 他

第6図 神奈川県内の大珠・ヒスイ製品分布図 (坪田 2012b)



第7図 神奈川県内の大珠・ヒスイ製品 (坪田 2012b)

—骨角・貝製品からみた—

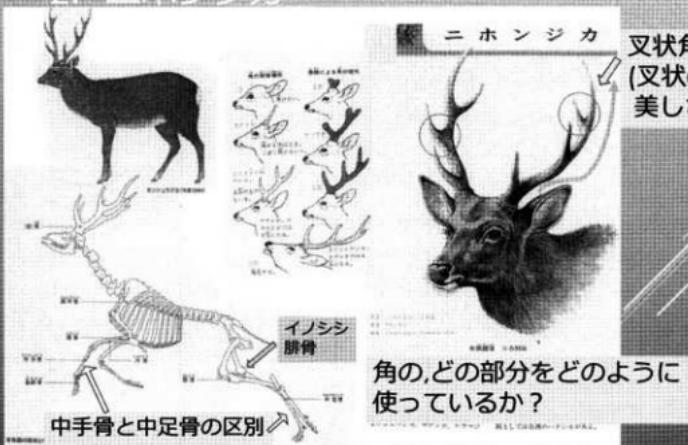
# 縄文人の装い

東京国立博物館 客員研究員  
金子 浩昌

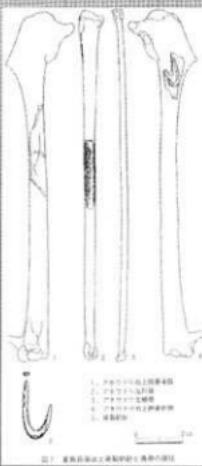
## 1. イノシシ



## 2. ニホンジカ



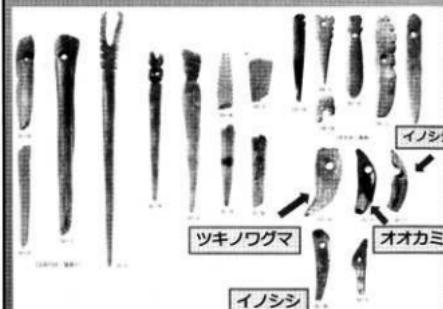
早期初頭  
横須賀市夏島貝塚  
釣針と穿孔鳥骨製品



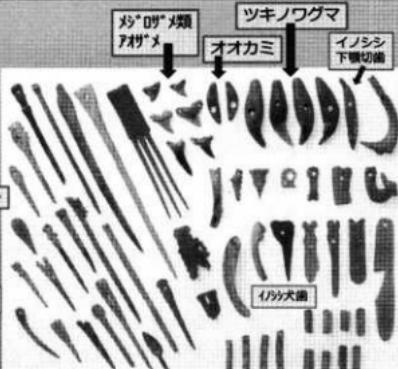
- アホウドリ右上腕骨
- アホウドリ左尺骨
- アホウドリ左桡骨
- アホウドリ右上腕骨
- 骨製釣針



前期関山式期小田原市羽根尾貝塚

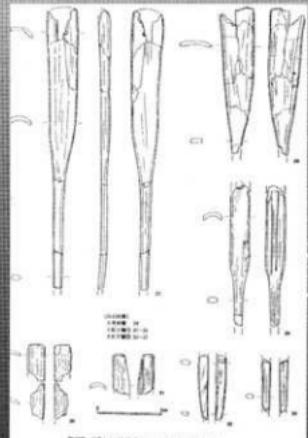
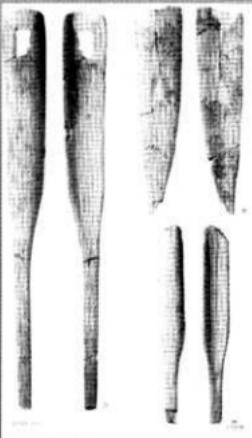


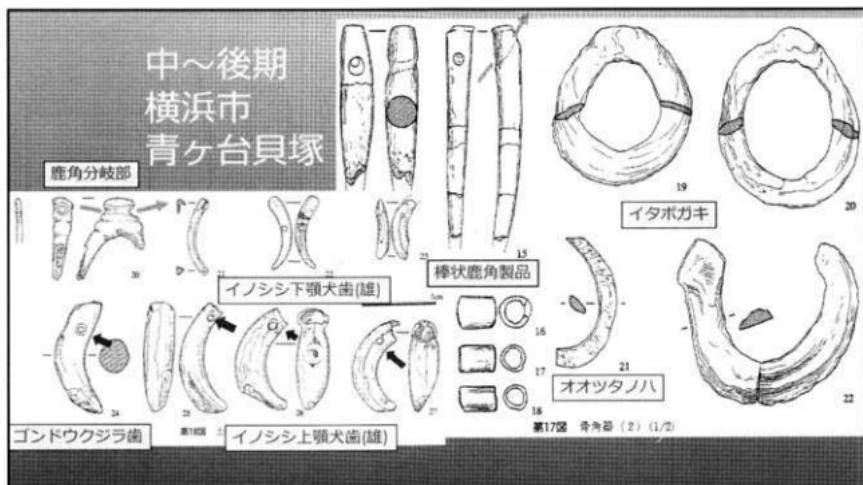
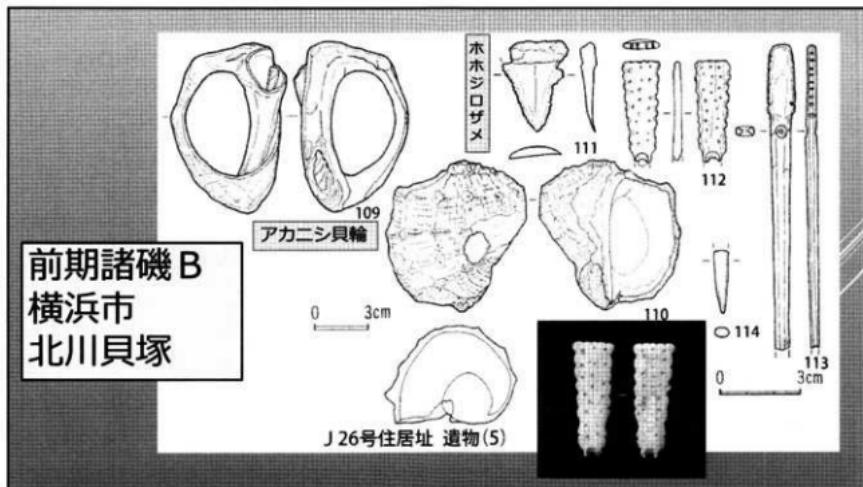
小田原市 羽根尾貝塚  
関山 II 式期

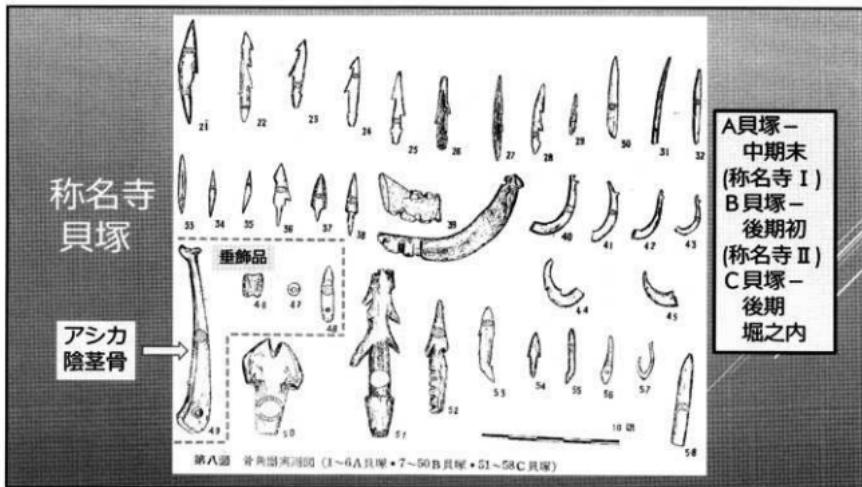


富山県富山市 小竹貝塚 骨製装身具  
諸磣A・B(浮島期)

万田  
貝殻坂型  
ヘラ状角器





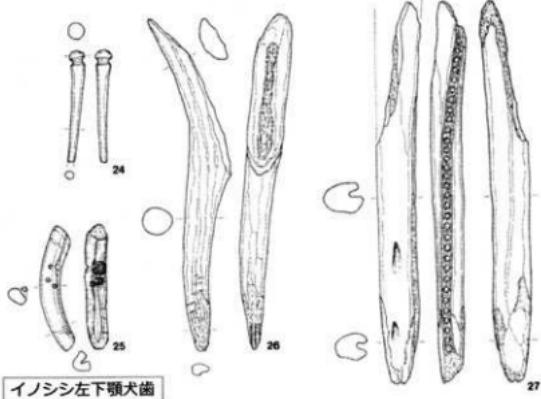


オットセイ雄の骨格と  
ハレム

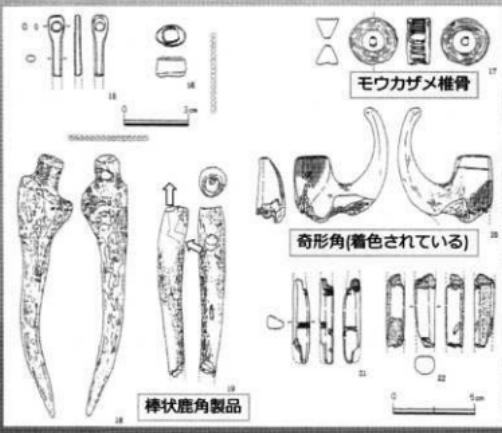
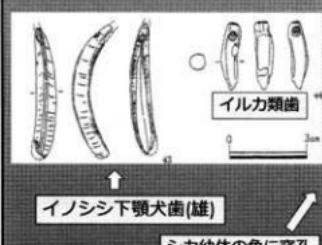


オットセイ雄

後期  
堀之内式期  
横須賀市  
榎戸貝塚

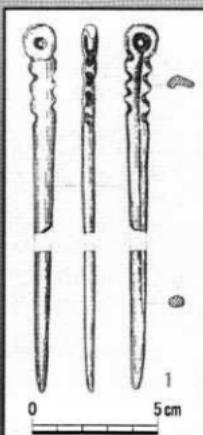


後期堀之内 I 式期  
横浜市  
稻荷山貝塚

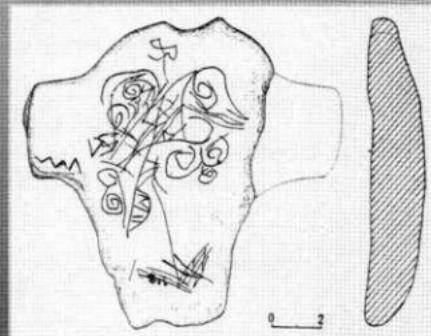


阿玉台式期  
千葉県  
香取市  
白井雷貝塚

骨製髪飾

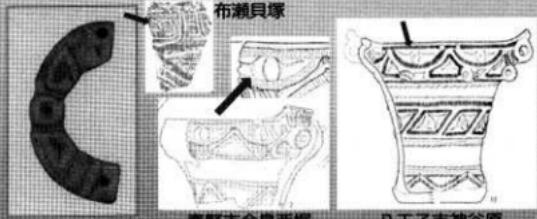


## 布瀬貝塚 岩偶



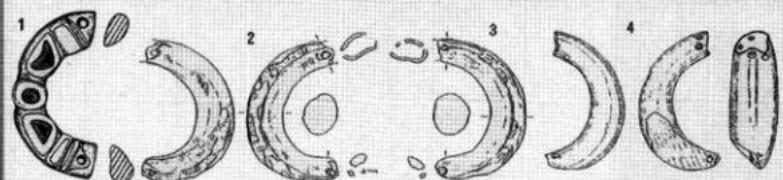
## 布瀬貝塚 鹿角製腕輪

千葉県下の貝塚出土  
イノシシ  
上顎犬歯加工品



夷野市今泉西塚

八王子市神谷原



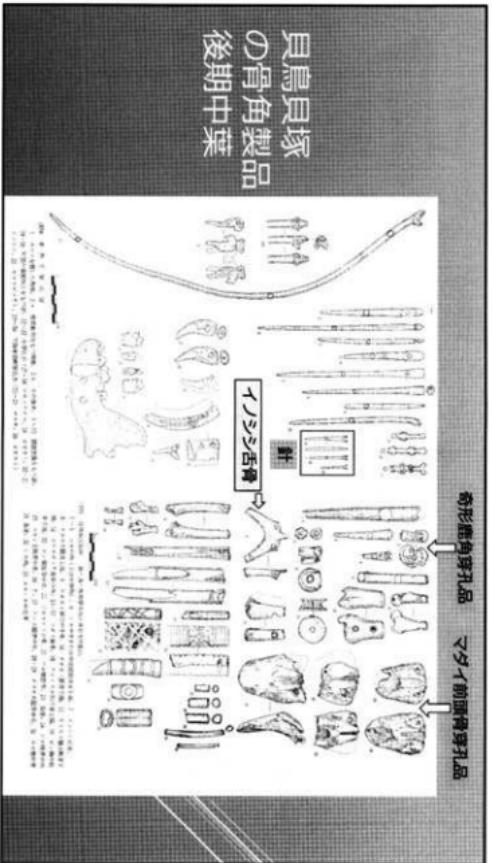
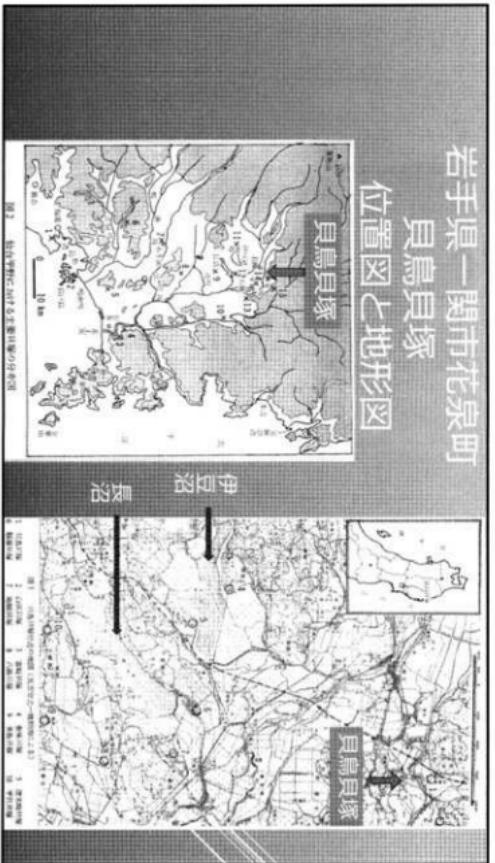
1.柏市布瀬貝塚

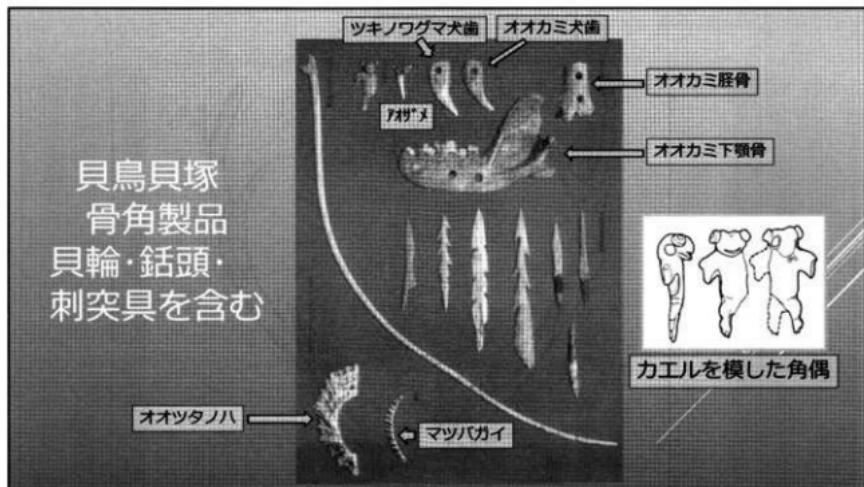
2.3.千葉市有吉北貝塚

4.千葉市草刈貝塚

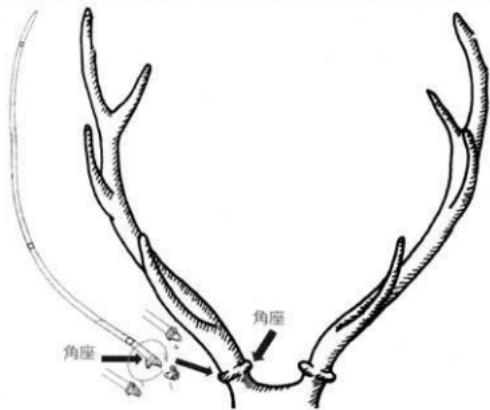
## 岩手県一関市花泉町 貝鳥貝塚

### 位置図と地形図

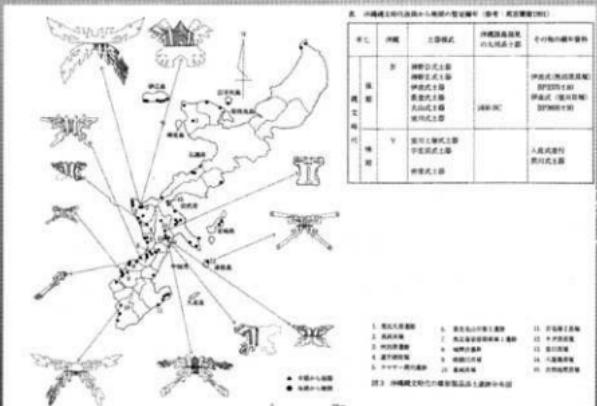


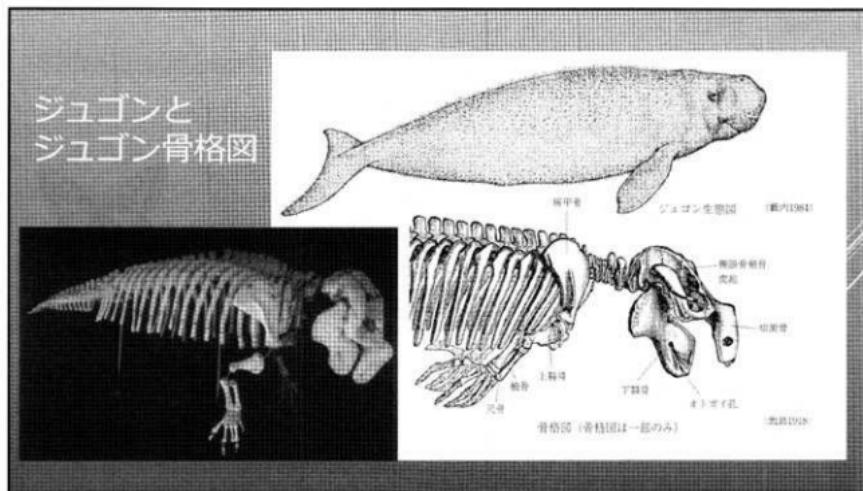


## 獣首鹿角製品と鹿角(ニホンジカ)を並べた図

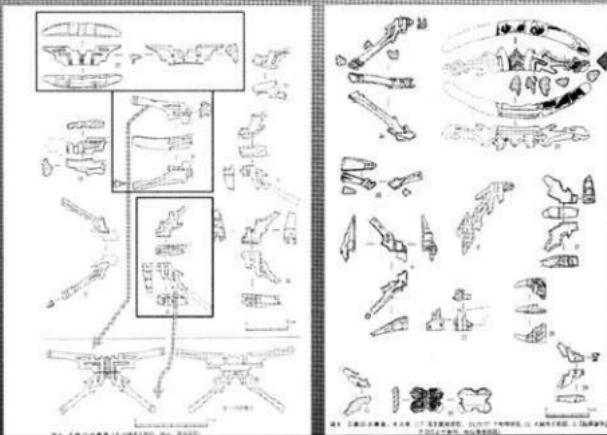


## 沖縄県 縄文文化の 蝶形骨製品の 分布図 縄文 後～晚期





うるま市勝連町 津堅島 オカ浜貝塚出土 古墳時代(島袋春美 1991)



## 蝶形骨製品と蝶(アゲハチョウ)

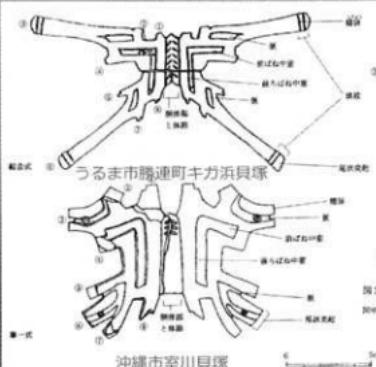


図1 蝶形骨製品の基本形態図 (高橋1996)

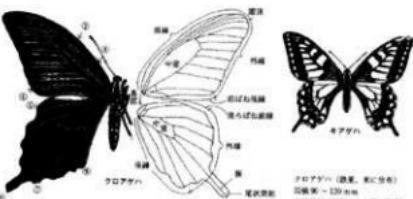


図2 キアゲハの骨形図 (小野田・村越1996)  
図中の①～⑤は図1の各部構造の対応している

キアゲハ (翅裏、裏に分色)  
可憐美 - 120 mm  
ラブアゲハ (本丸から背面に分離)  
可憐美 - 120 mm

## 蝶形骨製品の編年図

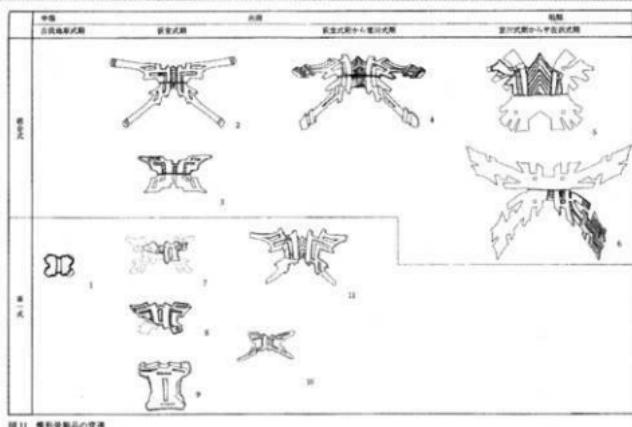
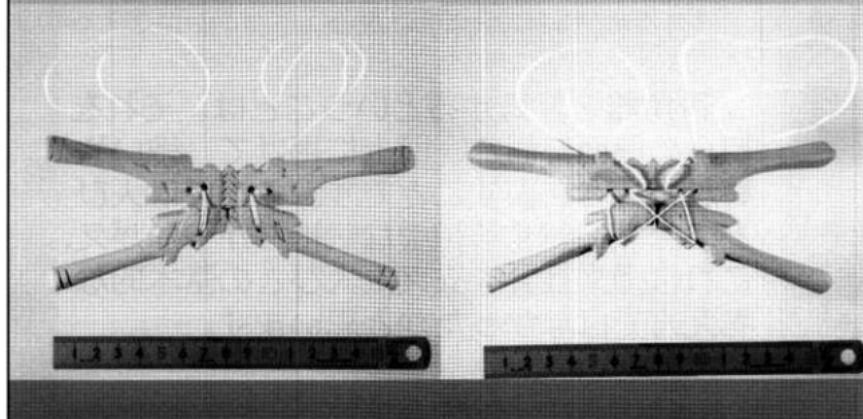


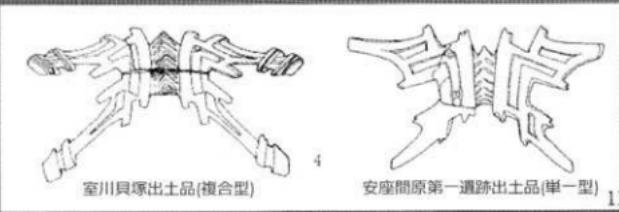
図11 蝶形骨製品の変遷

## 蝶形骨製品の模型を組み立てる



## 沖縄本島の縄文人と蝶の関わり

後期になり、低地帯へ居住が広まると、この地方に多数生息する蝶とのつながりも強まり、人々の心をとらえました。さらには自らが蝶になるとも考え、シュゴンの骨格に蝶の姿を写しました。現代の私たちにもそれとわかる特徴をはっきりと刻みました。そして、蝶への想いは三千年以上も経った今もなお受け継がれています。



## おわりに

骨角器を装身することは、それを自らの前面に置き、頭上に掲げて、敬いや尊ぶ気持ちを表すことです。そこには人びとの自然に対する謙虚な気持ちがうかがえ、これは縄文社会を支えた人びとの基本的な考え方ではなかったかと思います。

## 小林達雄氏著書より装身具に関する記述の引用

### 身分と装身具

#### 縄文社会に奴隸はいたか

邪馬台国の女王卑弥呼は、中国の魏王に使節を遣わしたとき、延べ四十人の生口、すなわち奴隸を献上したと伝えられている。弥生時代も中期ともなれば、農耕経済も軌道にのって、しだいに貧富の差を広げ、ついに奴隸さえ生み出すにいたったものと説明され、われわれはそれで十分に納得してきた。その奴隸の発生を、狩猟・採集経済につづく農耕経済の中に求める、唯物史観に賛同してきたのであった。

だから、縄文社会に身分階層や、奴隸の問題が議論されねばならないなどとは、まったく予想しなかったのである。しかし、それはわれわれが不勉強のままに、長らく狩猟・採集経済の社会を、きわめて単純なものと見下してきたに過ぎなかつたことを、改めて思い知るのである。

縄文化とたいへんよく似た文化が、北アメリカの北西海岸にみられる。いわゆるトーテムポールを立てた人々の文化である。サケ・マスに食糧を依存し、縄文時代と同じように農耕をもたない。この生態学的な背景とその生業が、日本列島の縄文文化に共通する点に最初に着目したのは、故山内清男博士であろう。それは縄文文化のサケ・マス論としてよく知られている。じつは、この北西海岸諸族は、たいてい少なくとも三つの身分階層と奴隸をもっていたのだが、これについての山内清男博士の見解は、ついに示されることがなかつた。

トーテムポールを立てた人々の文化と縄文化は、道具立ての種類をはじめ、それらの道具を駆使する技術水準においても、甲乙つけがたい類似性を示している。北西海岸諸族は、トーテムポールの制作に象徴されるように、木工・木彫にすぐれた技倆を發揮し、縄文人の追隨を許さない。しかし、その分だけ縄文人は、縄文土器に造形の幹をつくしている。一方の彼らは、土器作りを採用しなかつた。お互に短所・長所はあるものの、総合力は、ほぼ同じ程度である。おそらく身分階層制もふくめて、社会組織全体においても、いくつかの共通項があつたに違ひあるまい。つまり、縄文社会にも双分割や身分階層の分化、あるいは、奴隸の存在を考えしていく必要があるとする理由である。

#### 特定の人だけが付ける装身具

前期初頭に玦状耳飾り(図 216～219)が作られ、それはたちまち全国的に普及する。だが、それにしても数が少なく限られている。例えば前期の神奈川県上浜田遺跡墓壙群のうち、両耳に装着していたと推定される状態で、二個一対の玦状耳飾りを出土した墓壙は、三基だけである。他の墓壙からは、何一つ発見されない。あるいは、木製品などの装身具や副葬品があったかもしれないが、少なくとも石製の玦状耳飾りをつけていた人物は、全体の中でごく限られていたのである。これを装身具を好む人と好みない人との差にするのは、簡単であっても、問題の解決にはならない。

同様なあり方は、さらに栃木県根古谷台遺跡や山形県長者屋敷遺跡その他の例がある。いずれも絶

対多数の玦状耳飾りをつける人物群に対して、ごく限定された玦状耳飾りをもつ人物が、一つの共同墓地にふくまれていることを意味している。その人物は、玦状耳飾りの装身によって社会的に区別される身分ではないかと考えられる。他の多くは、それが許されないのである。

この耳飾りの着装には、耳たぶに孔を開けなくてはならない。つまり、耳飾りを付けることのできた人物は、あらかじめ穿孔をすましておかなくてはならない。これについて、北アメリカ北西海岸インディアン社会の高い身分の女性は、そのしかるべき年齢に達すると、大仰な儀式によって耳たぶが穿孔されたあと、宴会を開いてお披露目され、その身分が広く認知されるのである。縄文社会の玦状耳飾りにも、耳たぶの穿孔など、それなりの格式を伴うものとみるべきであろう。

また、縄文前期以降に、貝製の腕輪の普及がみられる。五〇例ほどの着装例があるが、圧倒的に女性が多い。なかには左腕に一五、右腕に一一という福岡県山鹿貝塚例(図234)がある。ほかに左腕に二〇個の女性もいる。

縄文社会における女性は、それ相応の仕事を男性と分担し、とくに子育てのほかにも植物の採集や潮干刈り、海草とり、さらに土器作りや織維工芸など、そうとうの労働が割り当てられていたと思われる。仕事をするのに多数の腕輪をはめていては、不便きわまりないはずである。しかし、その女性が、やっかいな仕事をしないでよい身分であったとすれば、問題は別である。

だれかが仕事をしない分は、他のだれかが代行しなければならない理屈である。それこそが、奴隸身分の人に課せられたのかもしれない。北アメリカ北西海岸諸族においても、一般的の女性には、水汲みや焚木拾いなどの仕事が割り当てられ、高い身分の女性の仕事の代行をさせられている。その人々は、祭りには参加させてもらえず、高い身分の人との結婚は許されない。一生奴隸で終わり、ときには宴会の席で財産を誇示する主人に殺されたりもする。また、あるときは、身分の高い家の幼児の死に付き合わされ、あの世へいく舟を漕ぐ役目を仰せつかる場合もある。縄文貝塚で発見される大人の女性と幼児の合葬例もまた、そうした背景があったのかもしれない。

『古代史復元3 縄文人の道具』1988.11 株式会社講談社

## 第5章 集落と社会

### 階層化の現れ

東日本縄文文化とよく似た文化をもつ北アメリカの北西海岸の先住民社会には奴隸がいた。縄文人と同様に農耕をもたない彼らは、採集経済の下では意外にも身分階層差を生み出していたのだ。縄文経済と、これにひけをとるものではない。縄文人の高度な組織力、文化力を見せつけており、それを可能にした組織力を發揮するだけの社会の仕組みの一環として身分階層があった、と容易に推測されるのである。

たとえば福岡県芦屋町山鹿貝塚の共同墓地の中で、腕に二〇個もの貝輪をはめた女性がいる。その貝輪は、いったん少女時代にはめると、その後はつけたり、はずしたりができないほど的小形であり、死ぬまで着装していかなければならない。こうした状態では、激しい仕事はおろか日常的な作業に

も不自由極まりない。つまり、この女性はそうした作業に手を出さなくて済む高い身分だったのである。とすれば、その仕事を代行した奴隸のいた可能性を考えなくてはならないであろう。また、文様を彫刻したシカの枝角制腰飾りをつけた男性の墓の例も高い身分層と考えられる。縄文社会の身分階層については、渡辺仁の先駆的な指摘があり、佐原真も注意を怠らない。このように考えると、母子合葬例と解釈されてきた例もまた、あるいは高い身分の子供をアノ世まで送り届けるために一緒に埋葬された奴隸との合葬であった可能性も考えておかなくてはならない。ことによると魏王に女王卑弥呼が献上した生口は、弥生時代に突然出現した奴隸層ではなく、その一部の出自は遠く縄文時代から続いた下層の人々、と考えられるのである。

身分階層の存在を物語るもうひとつは、玦状耳飾りである。早期末から前期初頭に現れ、アッという間に全国に広がった。分布はきわめて広いのに、一つの遺跡からの出土数は少ない。縄文時代の共同墓地を発掘すると、この耳飾りをつけた遺体は、一割以下しかない。つまりつけるべき人だけがつけた社会、を想定できるのである。その人たちは、指導的な首長層だったかもしれない。その下に一般の人たちがいて、そのまた底辺に位置したのが奴隸という仕組みである。

もっとも、最近発掘調査された福井県金津町桑野遺跡の共同墓地においては、ほとんどすべての墓穴に玦状耳飾りが出土しており、きわめて特別な事情をもつものと推定される。

## 第6章 精神世界を探る

### 翡翠をめぐる価値観

縄文人は、石を加工して狩猟具や調理・厨器具、工具などの第一の道具を作ったが、耳飾りや垂飾用の玉類も作った。これらは、縄文早期中葉には製作が開始され、前期初頭には一段と盛んになった。

とくに滑石の入手が容易な富山地方から青木湖周辺の北信地方にかけて、滑石製品を大量に製作する集団が現れたりした。富山県上市町極楽寺遺跡、長野県松川村有明山社遺跡などは、そうした遺跡である。中国の玉器の玦に似ていることから命名された玦状耳飾りを主とし、丸玉や管玉の類が作られている。そのおびただしい数量は、自分たちで使用するためばかりでなく、他集団にも供給することを目的としていたことを物語っている。

滑石を産出する所は全国に散在するが、そう多いわけではない。産出地を、縄文人が発見できなかつた場合もある。しかし、早期末から前期初頭に始められた玦状耳飾りの普及は、前期中葉までの短期間のうちに、北海道から九州まで全国に行き渡るのである。製作地は限られていたのに、この広域にわたる急速な普及は、当時すでにそれだけの流通の仕組みが出来上がっていたことを物語っている。中部地方北部の一角が、この耳飾りを通して、縄文社会の中で特別な地位を占めていたことは注目される。

時が下り中期を迎えると、新潟県西部で、翡翠(硬玉)に初めて目をつけ、玉の製作を始める。姫川上流に原産地があり、転石となって下流に運ばれ、海に押し流された一部は、再び海岸に打ち寄せられて漂石となつた。縄文人は、これらを採集して大小の玉に加工したのである。

その先駆者こそは、糸魚川市長者ヶ原遺跡を残した人々であった。同遺跡のいくつかの地点では、

前期終末の土器も発見されているので、翡翠の利用が中期に先行する可能性をも示唆する。また、山梨県大泉村天神遺跡の翡翠を、前期の所産とする向きもある。しかしいずれも、にわかに断定するわけにはいかない。現在のところ、翡翠の利用開始は、やはり中期に入ってから、と考えておきたい。

ところで翡翠は、硬玉の別名が示すとおり硬度七で、色は似ても硬度一～二の滑石と比べると、はるかに硬い。これを打ち欠き、磨いて形を整え、穿孔するとなると、尋常な作業ではない。しかし中期縄文人は、玉作りの材料としては不利なばかりで長所がないにもかかわらず、あえてこれを玉類の材料として選択したのである。古代中国でも、そして新大陸のマヤ文明でも、翡翠の澄んだ緑色に心を奪われたが、縄文人もまた例外ではなかったのだ。

とにかくその色や硬さなど、他の石材とはっきり区別される翡翠のもつ独特の魅力を特別視する点に注意が必要である。それこそが、縄文人特有の価値観の一端を見せるのである。縄文人の精神は、無限の多様性の中から、一定の価値観に基づいて対象を特定し、評価をえていた、その事実がそこにあるのだ。いわば縄文人の間には、縄文人による縄文人のための価値体系が形成されていたということである。

やがて、長者ヶ原および富山県朝日町境 A 遺跡の集団は、翡翠の玉作りに精を出す。原材料としてムラに持ち込まれた転石や漂石の量と玉数の多さは、自集団の需要をはるかに超えるものであり、前期の滑石製品の製作集団と同様に、他集団へも分配するつもりであったことを物語っている。これらの製作物のうち、並の大きさの玉類とは別に、数センチメートルから一〇センチメートルを超える大形品が、とくに注目される。この硬玉製大珠はカツオ節形大珠とも呼ばれるが、中期の中部地方を中心に分布し、北関東にもやや多く、東北地方一円に分布は及んでいる。

後期以降にもこの現象は継承され、北海道から九州まで広がるが、全体がやや小ぶりとなる。一遺跡からの出土は、普通は一点かせいぜい二点どまりである。したがって硬玉製大珠は、個人的所有物というよりも集団全体に関係するものであった、と考えられる。たとえ特定の個人が身につけたものであっても、おそらくはその装着者は、集団の中で社会的に認知された者であったと思われる。

そのためにも、大珠は翡翠製でなければならず、相応の大きさが必要とされたのである。また大珠の中には、翡翠の本領ともいいくらい緑色がなく、ただ乳白色にとどまるものが少なくない。このことは、大珠は鮮やかな色合いだけに価値が置かれたのではなく、とにかく翡翠であれば十分、と評価されていたことを示唆している。可視的な効果だけに左右されることのない、翡翠が指示する概念、つまり抽象的な次元にかかる価値評価なのであった。

翡翠を、数ある石の中の単なる一種としてではなく、特別に意味あるものに価値を昇華させ、これを広く全縄文社会に浸透させた長者ヶ原や境 A の集団の辯証ぶりは見事といふしかない。彼らは、とにかく翡翠を手段に、ある価値体系を定着させ、あまつさえ全国に影響を及ぼすほどの演出をした。大珠ばかりでなく、小玉類も含めて、彼らはその配給権を独占し、縄文社会のなかに自らの権力の位置を確立したのである。

翡翠の配給が社会的、経済的、政治的によく管理されていたことは、その分布がけっして原産地周辺に濃く、遠隔になるにつれて薄くなるという単純なものではない事実が、示している。つまり中期

以降晩期までを通観すると、原産地に隣接あるいは近接する遺跡といえども翡翠の保有量が多いわけではないのである。むしろ距離を置いた信濃川流域にこそ多く保有されていたり、さらに山形県庄内地方、そして秋田県を飛び越して青森県が、翡翠の大量出土地域となっていたりする。

原産地を抱え込む新潟県と富山県の次に、とくに翡翠をたくさん保有したのは、青森県地域だ。前期から中期の円筒土器文化、晩期の亀ヶ岡文化の中核的地域としての実績が、一方では翡翠入手する力を備えさせ、原産地集団にも認知されていたというわけである。

晩期は、翡翠の小玉が普及し、東北や北海道の墓墳からの発見例も増える。不足分は、翡翠の色に似た蛇紋岩製品で間に合わせたりしている。とくにいわゆる石器時代勾玉は、東北北部に多いことが注目される。原産地側でも、依然として翡翠原石の占有は続けられており、その集団は、新潟県青海町寺地遺跡に見られる巨木柱や大規模な配石構造の記念物などを残した。

寺地遺跡は、おびただしい数の転石や漂石を運び込んでいる。すなわちムラの中は、足の踏み場もないほどに翡翠がごろごろしている。彼らの技術と製作速度の点を考慮しながら試しに見積もってみると、たとえ縄文時代が現代までまだ続いているとしても、遺跡に持ち込まれたその翡翠原石の量はとうてい半分も加工しきれずに残ってしまうであろう。それほど翡翠を集めたのは、ほかの集団に渡さないための我利我利の占有意識に由来するもの、と考えられる。そして、翡翠占有によって獲得した特別な社会的な力が、巨木を立て並べたり、配石構造物の造営を可能にしたのである。

『縄文人の世界』1996.7 朝日新聞社

#### 縄文人のヒスイ觀念——あとがきにかえて——

その辺りに転がっている石ころを拾い上げて、適当な部分を打ち欠いて刃をつけ、道具に仕立てた大事件は、きっと二五〇万年前にまで溯る。人間と石との関係の始まりである。それ以前にも、チンパンジーの仲間のボルボにみられるように、手頃加減の石を加工することなく、そのまま用いて、クルミ類の殻を割ったりする経験を積んでいたものと思われる。それ以来、石は最も効力を期待できる道具の材料として長い歴史を辿ってきたのである。

石の加工の基本は、打ち欠く、割る、剥ぎとる、彫琢することであった。やがて骨角牙器に発揮された研磨技術も応用された。いずれにせよ、そうした石製の道具は、全体のかたちや刃のつけ方などの形態を工夫することで、対象物に対する具体的な作用を及ぼし、効果の促進が図られてきたのである。

石の加工に穿孔技術が用いられたのは、それから相当の年月が経つてからである。その前に、約八万年ほどの古さのアフリカ南部の洞穴遺跡から多数の小さな巻貝に穿孔したものがある。石の穿孔は、こうした技術基盤に旧石器時代文化最終段階になってようやく現われる。

日本列島の旧石器時代文化においては、三重県出張遺跡の有孔円板を萬矢とし、北海道湯の里、美利河遺跡例などのカンラン石製などのビーズが続く。

ところで、打製を主流とする道具作りの系譜上には穿孔はほとんど用いられることなく、環状石斧

や多頭石斧など稀である。ヨーロッパにおいても、青銅器時代以降の有孔石斧など道具の歴史上では後れをとっている。

その一方で、儀器、呪術具、装身具など、いわゆる「第二の道具」の製作には大いに応用された。首飾り、胸飾り、腰飾りなど、比較的小物で、その穴の多くは紐を通して垂下するためであった。

縄文時代に入ると、草創期の長崎県福井洞穴の有孔円板にはじまり、早期末から前期にかけて出現して、全国的に普及をみた玦状耳飾や中期初頭の有孔石箇状品や「の」字形有孔品などがある。石材には砂岩質もあるが、滑石が普通である。磨きをかけると、滑らかに艶がでて見た目にも美しい。また、適度な軟らかさ（硬度1度前後）故に、形を整えるにも、穿孔にも容易である。この性質がビーズなど身に着ける、いわゆる石製装身具などの普及と継続に預かって力があったのだ。

ところが、縄文人に限ってはこうした軟らかい石材と装身具との一般的にみられる関係に同調しない特異な動きをもみせて世界的にも注目される。ヒスイの採用だ。つまり、ヒスイは硬度6.5～7.0度で、容易なことでは整形もままならず、まして穿孔ともなると、さらに一筋縄ではいかなくなる。このヒスイには、さらに厄介な問題がつきまとう。

これをひとまず整理すると、

- 1 成形、整形、研磨、穿孔には、その硬さ故に膨大な時間を要するとともに、体力の消耗も甚だしい。
- 2 ひすいの原産地は新潟県糸魚川の唯一ヶ所に限られ、いつでも、どこでも入手するというわけにはいかない。
- 3 遠隔地で入手したり、運ぶためには、さまざまな長旅にまつわる障害を乗り越えて、核領域、中領域、大領域など他集団やその連合体の勢力圏の境界を通過せねばならない。
- 4 縄文人が拘わるヒスイは糸魚川産だけであり、硬さ、色合い、見た目の外見がよく似た類品（十勝産、長崎産など）といえども見向きもしない頑固さがある。

こうした事実から、ヒスイ自体の鉱物学的、物理的性質だけを縄文人は問題にしていたのではなかったことを窺わせる。むしろヒスイが発するオーラみたいなものに心を動かされていた節があるから問題は複雑なのである。

そもそも、「第一の道具」はもとより「第二の道具」において、意識した機能を具体的な材料に重ねてかたちをイメージし、いろいろの技術、技法によって実体化する（筆者提唱の「実体化過程の仮説」参考）に際して、できるだけ時間と労力を節約して、なおかつ効率が追求される。そのための道具のかたちや使い方が工夫されてきたのであった。

ところが、ヒスイのあまりの硬さはそうした目論見を許さず、加工の時間や労力を桁違いに要求され、日常的生活の効率化に反するのである。換言すれば、ヒスイにとことん拘わるのは、縄文人が常日頃目指していた効率からすると、全く不利であり、むしろ対極に当ることである。それだけ縄文人の通念、一般的志向とは明らかに異なる。極めて不自然なことといわざるを得ない。

効率性の追求こそが古今東西に共通する一般的な原理原則であるにもかかわらず、ヒスイへの拘泥はまさに縄文人特有の面目躍如たるものといえよう。ここに縄文文化の独自性、個性の重要な主張を

みるのである。

縄文人が、いわば文化の中核の一つにとりこんだヒスイについては、その硬さのほかに色合いにも単純には済まされない複雑さがある。ヒスイの青、緑の色合いは現代の宝石類に互して負けをとらぬ美しさの定評がある。

しかし、青や緑が全体にくまなく透き通っているものは極めて稀であり、その絶対多数は青や緑が斑状に表われる程度にとどまる。なかには濁った乳白色一点張りで、青、緑色の気配もみせないものとて少なくないのである。

特製の大珠にもそうした例がある。つまり、ヒスイへの拘わりはヒスイ色の美しさが至上の必要条件であったわけではなかったことを意味しているのだ。世間には、しばしば色香に迷う人を少ないとしないが、縄文人は決してそうではなく、ヒスイの色に或はされて、不覚にも深い関係を結んだというのではなかったことがわかる。色だけに気をとられていたのではなく、ほかの問題のあったことが、のことからも窺測される。

こうした観点を踏まえると、改めて硬さについても問題がある。たしかに現代の宝石事情においても軟らかいものは度外視され、硬さが求められる傾向が強い。硬ければ硬いほどに加工に手間暇ばかりか経費もかかるのに、ときにはその硬さが絶対的条件とされる場合さえある。縄文人にとってのヒスイは、縄文人の技術からすると、未だかつて経験したことのない限度をはるかに超えるシロモノであったはずである。

木島勉の穿孔復元実験によれば、一時間でようやく一ミリメートルにすぎないのである。縄文人時間にとっては、一時間の作業に集中することは相当な覚悟が必要である。小物一つといえども、完成させるには、成形から研磨、そして肝心の穿孔までに要する時間は、他の日常生活にかかわる作業時間の配分にも大きく影響を与えるほどのものであり、片手間仕事ではできない相談である。ところが、玉作りにおける硬さの手応えすら楽しみ、快感を覚えていた風も否定できない。

ただにカタチが必要とあらば、手短に実現できる滑石などを用いれば済むはずなのに、そうはしなかった。そのところにヒスイと縄文人とのただならぬ仲の秘密が潜んでいたのだ。

だからこそ、宮島宏が指摘する「堅いけれども硬くない」という単純なかたさではない、かたさの二面性が注意されねばならない。「堅」さにおいては、ダイヤモンドに負けぬほどの壊れにくさを誇るのである。そこに「装身具としての飾り、身体を飾るのに非常にいいという現代的な価値観以外に、人間の死骸が腐ったあとも、人間のかわりに、永遠……少なくとも何千年のちまでも、輝き・硬さ・色、そういうものをきちんと残してくれる」という森浩一の解釈につながってくる。

さてこそ、いろいろヒスイについて想いをめぐらせてみるものの、縄文人の想いの丈は依然として曖昧模糊としていてはつきりしない。

とにかく、入手困難を克服して我が物としたよろこびもまたヒスイの格別ぶりを強調するものであったのであろうが、そうしたヒスイにまつわる一つ一つではなく、全ての性質を一括総合して生み出された特別な観念の存在が重要である。その観念は、見た目や手ざわりを超えるものであり、頭の中にかたちづくられたものである。不可視の観念は、視覚や触覚とは別に、ことばを介して意味づけら

れ、合意されたものと思われる。しかも、その観念が縄文列島に遙く行き渡ったのには、その観念を最初にことばに変換し、そのことばで説明した演出者がいたからにちがいない。だれだろう、おそらくはヒスイ原産地糸魚川の地に縁のある個人、集団の中にいたとみられる。

やがて、ヒスイ観念の元祖縄文人のオクニにおいて、本書の元となった「ヒスイ文化フォーラム二〇〇三」のシンポジウムが企画され、実行された事業には大きな意味がある。過去のヒスイ事情を振り返り、踏まえながら、現代のこの地域のアイデンティティを確認し、未来への展望につながるものであることを改めて思うである。

『古代翡翠文化の謎を探る』2006.3 株式会社学生社

## 11章 交易

### 5 特產品(磨製石斧・耳飾)

交易に関して、天然資源の原産地との関係とは別に、製品の流通問題がある。

富山県境 A 遺跡（中期）では、平箱単位で数えるほどの蛇紋岩製の磨製石斧、その未完品、破損品、原石がある。神奈川県尾崎遺跡もまた、磨製石斧の代表的な製作地であり、多数の未完成品が残されている。並べて眺めると製作工程がよく判る。また、新潟県元屋敷遺跡は後、晚期であるが、硬質砂岩製の磨製石斧、未完成品、破損品など一万点に及ぶ膨大な数がある。自分のムラだけでは到底使い切れる量ではない。つまり他の地域集団への頒布を念頭に製作していたのであろう。大量の製作に必要な人員と時間の投入は相当なものであり、いわばそのムラにとっては重点的作業として大きな意味をもつ。縄文社会のしくみにかかわってくる問題ともなる。因みに、同時期の新潟県藤橋遺跡では、沢山の硬質砂岩製の磨製石斧が出土しているものの、未完成品はない。自給自足ではなくヨソの集団から入手していたことを物語る。

同様な観点からすると、晚期の千葉県余山貝塚のサルボウ製貝輪も注目される。東京大学総合研究博物館をはじめ広島県生口島の耕三寺や茨城県立歴史館など三機関に保管されている量をみると、平箱にぎっしり詰めて十五箱以上が採集されている。大部分が貝殻の中央部に大きく孔を開けた状態であり、続いて磨き工程を経た上で大量の製品に化ける寸前のものである。その作業が引き続き行われようとしたのか、それとも半成品を出荷しようとするものであったのか。興味深い問題である。

前期に遡ると、滑石地帯に登場する玦状耳飾の製作遺跡がある。富山県極楽寺遺跡や長野県青木湖周辺の遺跡では、滑石入手し易い土地の利を生かして、大量の製作が行われ、完成品、未完成品、そして失敗作など夥しい数が発見されている。

群馬県の千網谷戸、茅野遺跡では、晩期に精巧な土製耳飾を大量に出土している。数の上での第一位は、長野県エリ穴遺跡であり、二七〇〇点を超える。ムラの住人用には余りある。その分配には、単に耳飾の需要に応えてのことなのであろうか。それとも、与える側と与えられる側というような、より高次の社会的問題にかかわるのであろうか。縄文社会にとっては極めて重大な意味をもつのである。

つまり、もののやりとりは、単なる不足品の補完や対等の物々交換では済ますことのできない、縄文時代の社会組織の性格あるいは縄文社会の維持の問題にもかかわってくるのではないかと思われる。改めて、この問題を正面に据えて取り組む必要がありそうである。それによって、縄文社会の解明は一段と進むはずである。

## 6 ヒスイ製玉類

さまざまな特産品の中でもヒスイはとりわけ特別な存在である。第一に、その原産地は富山県寄りの新潟県糸魚川市の山中一箇所に限られていて、北海道、長崎などに類似品はあるものの、他はない。そのくせ縄文列島全城に広く行き渡っている。第二に、これまでいろいろな種類の石器材料として利用されてきた石材とはまるっきり異質の特色をもつものである。つまり、いわゆる身体装飾品に使用されてきた同類の滑石などに比べて、歯が立たないほどの圧倒的硬さを誇る。入手が困難で、かつ加工が容易でない。いかにも玉類の材料としては極めて不利な代物というわけである。それにもかかわらずヒスイに執着を示してやまないところに問題がある。それほどの事情あってのこととせねばならない。たしかにヒスイの色合い、輝きは美しく魅力にあふれている。しかし、どれほど感性に訴えたとしても物理的に不利な条件を簡単に払拭することは到底できない相談である。それを超えさせたものとは一体なんであろうか。

とにかくそれほどの悪条件を備えたヒスイを、縄文人は結局モノにして、みごとな玉に仕上げたのである。それまでの玉類といえば、主として滑石を材料としていたのである。硬度が一という柔らかさで、成形、研磨はなんの造作もなく、独特な块状耳飾を発達させ、全国に普及させた。ところが、ヒスイともなると硬度は六・五から七というダイヤモンドの一歩手前というもので、これを彫琢、研磨し、しかも穿孔するのは大変である。木島勉の実験でも、一心不乱に作業してもようやく一時間で一ミリメートル前後にすぎず、掌の皮がむける痛さに泣かされる。効率の悪いこと甚だしい。玉の材料としては、普通の常識では最悪あるいは問題にならない。そもそも、効率性の追求こそが古今東西に共通する人間本性の一般的原理原則である。縄文人もまたご多分にもれず、常日頃効率を目指していたはずであるのに、ヒスイを玉の材料に選び、しかも拘泥するのは、日ごろ心がけていた効率化志向に明らかに反する。

具体的な理由をはっきりと知ることはできないけれども、縄文人が辿ってきた長い歴史、経験の蓄積から醸成された総合力の意外な表われとしか言いようがない。

## 7 ヒスイの加工

不利な条件や障害があると、諦めてしまうかといえば、そうではない。かえって克服しようと闘争心をかき立てられるのが人間である。その人間縄文人の精神もたしかにヒスイに対して働いたとみる。どうにも手に負えないジャジャ馬を手なずけるのに似ている。その精神がそれまで道具作りの材料してきた石材とは全く異質のヒスイに遭遇したとき、敬遠することなく、積極的に縄文人の手の中にとりこんだのである。縄文中期の大事件だ。

自然の石ころ状態を変形し、それまで絶えて見ることのなかった大型の垂飾品に仕立てた——硬玉製大珠または鰐節形大珠と呼ぶ——のである(図21)。続く後期を経て晩期になると、もう一つの新しい、いわゆる勾玉の形を創り出した。クマやオオカミの犬歯に似た形状の獨特な勾玉は、縄文人が独自に発明した誇るべきカタチであり、ほかには世界のどこを探してもない。弥生時代以降、古墳時代にも大いに発達し、朝鮮半島の人々の王冠を飾った。歴史時代に入ると、また記紀にみる八尺瓈の勾玉として三種の神器の一つとなり國体の象徴ともなった。しかし、仏像の宝飾に残るが、日本文化の本流からは次第に消えてゆく。一方では北のアイヌの人々の、いわゆるアイヌ玉の中に引き継がれ、南西諸島のノロの祭祀具の中に収められてきた。斎場御嶽の発掘調査で出土した鍍金の勾玉三点のみごときは耳目をひくものである。

ヒスイをとりこんだ縄文人は成形や研磨とは別にその玉作りにおいても斬新な技術を発見した。それまでの穿孔は、石製の錐を用いるものであり、孔の断面は先細りの漏斗状となるのであったが、そうした旧来の方法ではヒスイに対して全く歯が立たず、いくら時間をかけてもカスリ傷程度の働きさえも期待できなかったのである。しかしそれを克服する技術を編み出したのだ。つまり、鳥の管骨あるいは乾燥させた笛や竹などの中空の錐を用意し、石英の粉末を研磨剤として活用することで、穿孔が可能となるのである。錐自体は軟らかく、それこそ己が身を削って孔を穿つのである。この新技术は、錐に硬度を求めるのではなく、中空の形状を活用し、これを回転させながら、ヒスイより硬い石英の粉末をこすりつけて穿孔するのである。

伝統的な穿孔とは、棒状に成形した石の錐を用い、その石錐よりも軟らかい対象物を穿孔するものであった。しかし新技術の真骨頂は、軟らかく錐(管錐)は回転運動の機能だけであり、穿孔は管錐の回転運動によってヒスイに直接干渉する石英の硬さによって果たすというものである(図22)。

換言すれば、ヒスイ穿孔に当たって、開発された新技術は伝統的石錐穿孔の単純な延長線上で実現されたものではなく、回転運動と対象物への干渉との二つの作用の組み合わせ、総合であり、次元の高い画期的な技術として評価されるべきものである。縄文人独自の発明としての漆技術と並ぶ注目株である。

## 12章 交易の縄文流儀

### 2 縄文時代の商人問題

交易問題に関連して、物の流通に携わった当事者達についての見過ごすことのできない一つの仮説が提起されている。小山修三、岡田康博による『縄文時代の商人たち』だ。つまり、縄文時代に「交易があったことは確実なわけですから、その実務を担った人たちの存在を想定することは当然の流れ」であり、「縄文時代に商人を想定することによって時代の常識を決定的に書き換えられるのではないかと考えます」と気負い立つ。

商人とは、交易、流通にかかわり、物品を扱い利ざやを稼ぐ商取引行為をする人である。通常は専門に從事して商売の利潤で生活する人を意味する。専業かパートタイマーかどうかはさておくとしても、少なくとも利ざやを稼ぐという商人を商人たらしめる性格を考えてみたとき、果たして縄文時代

に商人がいたのかどうかという問題は決して小さくないのだ。本当に縄文社会に商人が活躍していたのだとしたら、イメージはもとより、縄文社会の本質はがらりと違ってくる。そもそも商人が生きてゆく社会には、商行為が受け容れられる十分な条件が整っていなくてはならない。縄文社会は、そうした条件の成立以前の段階にあるところにこそ縄文社会たる所以があるのであり、決して商人の生まれ出る気配すらない社会なのだ。あるいは、己れの性を販ぐ女性の商売の存在すら積極的に主張する。けれども、その行為のシルエットは同じであっても、習俗か、商取引の一つと見立てるかは、慎重でなければならない。人間学にもかかわってくるはずである。この基本的な認識なくして、縄文時代に商人がいたというような軽々しい議論には断固たる異を唱えたい。提唱者によるていねいな説明は、縄文に关心を抱く人に対しては当然ながら、世間一般に対しても、どうしても欲しいところである。縄文社会像をゆがめる発信は到底許されることではない。

とくに、縄文人の交易に底流するのは「気っぷ」の良さであり、経済的価値の等価交換や平均化ではないという考え方からすれば、まさに対極にあり、全く賛同しかねる。心地よい酒場での談論風発の後、割り勘で清算に走る今日の光景が思い出されて仕がない。この問題は重大であり、十分議論を尽くすべきである。いずれその機会を用意する必要があると考えている。

『縄文の思考』2008.4 株式会社筑摩書房

#### 絶対的でない男女の役割—装身具

縄文人が寄り集まって生きてゆくとき、各々は分相応の働きをしながら、しだいに集団の中に自分の身の置きどころを見つけてゆく。とくに男は男に、女は女に合った仕事を分担し、性的分業がますます固定化する。こうして男と女は、性的に寄り添って遺伝子を後代に継承してゆくこととは別に、構造的な仕組みとしての社会を形成する基礎をつくった。

自分の腹を痛めた赤ん坊に授乳して、慈しみ育てる女性を陰に陽に支えるのは男の務めであり、何よりも家族全員に必要な食料を確保することが肝要である。

そのために、男は筋肉質で、骨格も頑丈であるのは、まさに神の思し召しである。こうして力強くで動物に立ち向かう狩りが男の仕事となったのは至極当然の理であった。しかし、動物を狙いさえすれば、いつも成功するというわけではない。相手も迷れようと必死となり、追いつめられると窮鼠猫を噛むごとに反撃に転じたりもする。油断大敵、自分も傷つき、命さえ落としかねないのだ。

この命懸けの仕事を他と峻別して、最高に価値あるものなのだという観念に高めることで、古今東西の狩猟民の男は納得する道を選ぼうとする。縄文人の男も、決して例外ではなかつたはずだ。とにかく社会的に男が女の上位に居座る傾向の遠因が実はここにあったとみられるのである。

このことは男・女の生理学的な性質に上下があったことを意味するのではない。性的分業についての社会的評価において、女子供をはじめ老人のために、先頭に立って高カロリーを確保する動物性たんぱく質を供給する者としての働きに、命さえ懸ける男が、せめてもの見返りを要求したにほかなら

ない。つまり、単なる魚とりや植物性食料の採集とは一線を画して、狩りこそは仕事の中の仕事と意味づけることで、したいに男の社会的主導権が確保されてきたのである。

縄文時代にみられるさまざまな装身具も、こうした男・女の社会的なあり方と密接に関係するものであった。貝でつくった腕輪は圧倒的に女性用であり、鹿の枝角でつくった腰飾りは逆に男がもっぱら身につけていた。とはいものの、腕輪をはじめた男や腰飾りをぶら下げた女もごく少数ながら混在していた。とくに耳たぶに孔を開けて装着する耳飾りは、確かに女に多いが、男にもそこそこの数がいた。縄文社会の男と女の間には明瞭な差が認められるものの、それが絶対的なものでもなかったことを物語っていて興味深い。

1999年4月1日、二年前に改正強化された男女雇用機会均等法が施行された。いよいよ仕事場での男女の平等が法的に保障され、我が国も名実ともに世界の先進国に仲間入りしたというわけだ。これまで男の仕事、女の仕事と決めつけてきた職業にも、どんどん相互乗り入れが活発化してきた。

こうした昨今の風潮が、男と女の生理的肉体的な性質、あるいは心理学的性格の差違を軽視している、というよりも、どうも積極的な否定を前提としているかのようにみえる。確かに男と女が社会的に差別されてきたことは事実であるが、それは女の価値が低く、男が高いとする意を意味するのではない。むしろ性によって分担する仕事、社会的役割を、いろいろな時代や地域によっては、男女の貴賤、上下の問題に変換してきたのは、現代の社会的状況を基準にして、過去にさかのぼってまで一方的に後追い評価してきた結果の現象にすぎないのだ。

とくに男が歴史的に演じてきた、そして現代においても主導権を握っている多くの事柄が、地球規模の大気汚染や環境破壊はもとより、いまだ消すことのできない世界各地の小競り合いや戦争など、狩猟採集民時代以来の男の血に流れる遺伝子のなせるものだという可能性が大きいとみる。もちろん決してほめられたことではないのであるが。

とにかく、こうした男の社会的な機能こそいかに抑制すべきかという反省をもとにした新しい哲学を抜きにして、かえって女性にもこれまで男性が犯してきた負の分野にまで参画の機会を均等化しようとする狙いだけを独り歩きさせてはならない。むしろ不平等を守ることの積極的な意味への評価が必要とされている、と私は考える。

#### 現代との相似形—アクセサリー

縄文時代には、近代から遡って江戸、そして室町、鎌倉、さらに平安、奈良にいたる、どんな時代よりも現代の現象と最も近い相似形を見せるところがある。そのひとつが、身を飾るアクセサリーにまつわる事柄である。

イヤリング、ネックレス、ブローチ、プレスレット、あるいは指輪や櫛、かんざしなどの各種が、時代をはるかに超えて、縄文と現代に共通してみられるのだ。しかし、間に介在するさまざまの時代には、櫛などごく一部を除いて、ほとんどアクセサリーを身につけるという習慣は行われたことがなかった。

たとえば今日、老若にかかわらず、女性に人気の高い耳飾りといえども、1960年代後半に入つて急激に広まつたつい最近の新風俗である。それまでは耳飾りをつけるのは、宝塚や松竹歌劇団その他の女優などに限られていた。さらにさかのばれば、鹿鳴館に集う貴婦人たちなどに一時的に身につけられることはあっても、風俗としては定着せず、江戸以前ともなると、ほとんどその気配すらうかがうことはできない。しかし、縄文時代には耳飾りは、全国的に最も広く普及していたのである。その後、弥生時代にいったん廃れ、古墳時代に再び耳飾りの隆盛を見るが、古代以降にはその影もすっかり潜んでしまつた。

耳飾りだけでなく、日本人は縄文の豊かなアクセサリー文化を継承することなく、いかにも地味な身だしなみで永く生きてきた。少なくとも耳飾りは、欧米はもとより、アフリカや南太平洋の島々、あるいは隣の中国やアジア各地の少数民族にいたるまで、いろいろな材料でさまざまなものがつくれられている。縄文人は、現代までの日本の歴史上唯一、こうした国際的なセンスに肩を並べていたのであった。

その縄文人も、そのはじめはアクセサリーとは全く無縁のままに二千年以上も過ごしていた。この空気を破つたのは早期後半の鹿児島県地方であり、粘土製の滑車形耳飾りを独自に発明した。耳たぶに孔をあけてはめ込む形式で、直径が5センチメートルにも達する大形品さえみられる。その重みで耳が長く垂れ下がって、大いに人目を引いたはずだ。しかし、他の地域には伝わらず、短命のうちに消えた。

それからしばらくして、今度は滑石製の玦状耳飾りが登場し、たちまち全国に普及した。その形は直径約2センチメートルの環状で、一ヵ所に切れ目があり、ちょうど中国の玉器の玦に似ている。紀元前5000年以上の古さにさかのぼるが、その起源はほぼ同年代の中国河姆渡遺跡例などに求められる、という考えが一部で有力である。けれども明瞭な裏付けがあるわけではなく、むしろ縄文人の独自な発明品の可能性が高いとみられる。群馬県榛東村の耳飾り館には中南米の先住民のものが、もうひとつ他の人の空虚の実例として並べられている。

縄文中期にさしかかると、文化的活力は頂点を極める勢いを示し、各地の縄文土器も派手さを競い、華やかさを誇った。この頃から土製の耳飾りも復活、石製の玦状耳飾りはしだいに人気を落とした。

また、新たに鹿角製の腰飾りが加わり、後期、晚期まで続いて、弥生時代にも継承される。

ほかには、小玉を連ねたネックレスや大珠などを吊り下げる垂れ飾りがあり、中期以降はヒスイ製が現れる。とくに晚期には、日本的な造形を代表する勾玉の原形が始まり、弥生、古墳時代における発達へつながる。その他、櫛やヘアピン、指輪、足結など多種多様あるなかで、耳飾りとともに最もボビュラーなのは貝製の腕輪であった。

それらのアクセサリーには、男女によって、おおまかな区別があった。耳飾りや腕輪は圧倒的に女性用でありながら、男性にも着装者がいた。その点も現代に似ている。逆に腰飾りは男性に偏る。

それにしても、縄文人は各種のアクセサリーを発達させてはいるものの、誰もが身につけることができたというものではなく、せいぜい一割程度に限られていた模様だ。彼らは社会的に特別認知され

た人々であり、ときにはアクセサリーによって縄文社会の中で自らのアイデンティティーを主張する者であったのだ。

#### 副葬品が崩す「平等社会」観——身分階層

縄文人の社会においては、身分に高下の隔てなく、平等であった。そもそも身分階層は弥生時代以降の農業社会のひずみから生じた不幸な所産だ。こう聞かされて、さもありなんと充分に納得して疑念の一かけらも意識しようとはしなかった。だからこそ墓のつくりも五十歩百歩の同じ規模であり、同じ内容を示している、というのである。これが從来の縄文認識の大前提であった。

ところが、この仮説は縄文研究の事実の積み重ねの中から導き出されたものではなく、いわゆる唯物史観の教義をそのまま当てはめてみただけのことなのであった。つまりどうも縄文文化の実際は、その偉大なる歴史観の枠をもはみ出し、予想された歴史の流れにも決して易々と乗るものではないのである。そして、この点が縄文文化の個性、特殊性を際立たせているのであり、出来合いの色眼鏡で視ることを許そうとはしないのだ。

たとえば縄文人は全て平等だったという第一の根拠とされた墓を改めて見てみると、こうした事実ではなく、むしろ副葬品などに歴然とした貧富の差が示されているのである。縄文晩期の秋田県湯出野遺跡は、当時のムラから離れた場所に営まれた共同墓地であるが、百十八基の墓壙が確認され、そのうち中央部などにあるやや大形あるいは円形の十基から副葬品が認められ、とくにヒスイ製を含む百二十点もの小玉を持つものは何一つ副葬品を持たない空っぽの大多数を圧倒する。

ヒスイは、新潟県の富山県境に近い姫川上流が唯一の産出地であり、はるばる秋田の地まで運び込まれているのである。硬度七前後という性質は、形を整え、孔を穿けるにも二、三日の作業では到底足りず、気の遠くなるほどの時間を必要としたはずであった。滑石はもちろん、色合いが似通う蛇紋岩と比べても尋常ではない加工の手間暇は、効率の点からみると、いかにも短所にみえながら、それを超えて重宝するという縄文人的価値観がおもしろい。今日の宝石に対する思い入れとも共通していて、これを縄文人の先取性とみるべきか、それとも現代人の心性にちっとも進歩のなかった論より証拠とすべきなのであろうか。

とにかく、ヒスイを崇め奉る風潮が中期以降に興り、たちまち全国に広まった。北は青森県三内丸山遺跡に達し、さらに津軽海峡を渡って北海道に入った。しかし、その所有者はムラのごく一部の人間に限られ、しかも複数を所有しながらも平等に領持とうという気配を一切みせはしていない。

この三内丸山遺跡のど真ん中をほぼ東から西に道が走り、全長が四百二十メートルにも及ぶが、その道を挟んで両側に墓壙が互いに向き合うかのように二列に並んでいる。これまでに約二百二十基が確認されているが、そのうちの十基ほどは石で閉ったりしている。こうした墓壙は全体の五パーセントにすぎず、それが特別に丁重につくられているのである。これはムラの成員に明瞭な差別のあったことを示して疑いを差し入れる隙とてない。

ものは狩猟・漁労・採集を本分とするわが縄文人社会に、厳然たる身分階層があったと考えるしかない。縄文人と同様に農耕をせず狩猟・採集を旨とする北アメリカの北西海岸のトーテムポ

ールを立てた人々の間にも、ときには奴隸を抱えて四階層もの身分差が認められたりする。この事例に注目する渡辺仁（一九九〇）は、縄文社会を階層社会とみる代表である。

たしかに、縄文時代の葬制においても、単なる墓壙への埋葬だけでなく、ベニガラを大量に散布するもの、明らかに火葬にかかるもの、埋葬した遺体を掘り出して骨を集めて壺に収納し直すもの、石で囲むもの、立石を持つもの等々、そのいくつかは身分階層の差を反映している可能性がある。副葬品の有無だけにとどまらず、身分差と葬制は複雑に絡み合っているのだ。

また、耳飾りや胸飾りや腕輪や足輪などのアクセサリーも縄文人に等しく行きわたっていたというものではなく、特権階級のみがその装着を許されていたものとみられる節がある。福岡県山鹿貝塚の成人女性の一人は、左腕に十五個、右腕に十一個、他の一人は右腕のみ二十個の貝製腕輪をはめていた。

もともと両腕に二十個あるいはそれ以上の同数であったが、右利きの彼女たちは右腕の腕輪をついこわしがちであったことをうかがわせる。貝殻の大きさに限りがあるので、着脱自在の充分な大きさに仕上げることができず、ひとたび少女期に着装するや、こわれても後では補充がきかない。いずれにせよ両腕に二十個ずつの腕輪をはめていたのでは、仕事に差しつかえるに決まっている。それにもかかわらず、多数の腕輪をつけた一部の女性がたしかにいたのは、激しい仕事をしないで済ますことのできる身分であったからにちがいない。そうなると代わって仕事をする階層も必要となってくるという具合に、もしかしたら奴隸さえいたのではないかという可能性が出てくるのだ。

ところで、成人の女性あるいは男性と幼児との合葬例が少なからず知られている。春成秀爾（一九八〇）はそうした事例を集めながらそこに親子もしくは祖父母と孫の関係、すなわち緊密な親族関係に見立てている。埋葬人骨の大部分は土中で分解して影も形も失われ、よほど了好条件に恵まれたものだけが遺存できるのである。そうした偶然性を考えると、親子などが同時に死んだ例があまりにも多いことになるのだが、果たしてそうみておいてよいのだろうか。

しかし事実は年端もいかぬ子供と、それに寄り添って身分の高い子供に無理矢理あの世までのお供と命ぜられた奴隸あるいは奴隸身分の乳母たちなのではないかと推測する余地がある。実際にそうした例があるトーテムポールを立てた人々の間にもみられるのである。

時代が下って、邪馬台国の卑弥呼などが中国に使節を派遣する際に生口（奴隸）を贈り物としているが、その身分は縄文時代以来の最下層民であった可能性が高い。弥生時代になって、突然奴隸が生まれたり、つくられたのではないのである。

縄文社会の身分階層が生まれたきっかけは、共同作業において指揮をとる者、従う者あるいは分相応の役割分担が、共同作業完了後にも尾を引いて、しだいに固定化する過程で世襲化された結果と秘かに考えているところである。

『縄文人追跡』（文庫版）2008.10 株式会社筑摩書房

※ 出典は、各文末に付した。

※ 出典書籍と引用部分の選択は、講座担当により行った。

平成 27 年度考古学講座  
**縄文時代の装い**

発 行 日 平成 28 年（2016 年）2 月 21 日  
編集・発行 神奈川県考古学会  
印 刷 株式会社 興版印刷